
I S -AVERAGE or HALF-

瑠璃心月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - AVERAGE or HALF -

【Nコード】

N7745T

【作者名】

瑠璃心月夜

【あらすじ】

IS - AVERAGE or HALF - は藍越高校に通う一人の学生がISが使える・・・という感じで

”男でISが使える奴が一人出たのだから他にも居るはずだ!!”
という理由で行われた検査によって発見された二番目の男の話です

更新は・・・亀です

プロローグ（前書き）

ええ、

あまり自信はありません

が

友と考えていい作品にしていると思っています

では、どうぞ

プロローグ

物語は始まる、いや……始まっている

俺……俺の立ち位置はオリムラ イチカという一つ年下の男のキツカケによって無くなった。

立ち位置……それは平均と半分という名の制約に基づいていた立ち位置……その位置に不満はなかった。

むしろその位置にいたからこそ友人の役に立っていたこともあり好きな位置だった。

しかしその立ち位置はもう無い、そして今思えばそんな位置よりも今の立ち位置が好きな自分がいる。

これもオリムラ イチカと天才のおかげかもしれない……

制約を打ち破れなかった俺に勇気ともう一度立ち向かうためのチャンスを与えたのだから。

「IS学園 1年1組 2番 安部^{あへ} 零時^{れいじ}！」

これが今の俺の立ち位置だ！

そして今は黒い所属不明機と戦闘中

「俺は！俺は！平均なんて認めない！！！！！」

プロローグ（後書き）

み、短い……もっと長くできるように頑張ります

01（前書き）

うう……自信が……

でも皆様に読んで楽しんでもらえるように考えました

では、どうぞ

Average

想像以上にキツイ、これはキツイ この一言が一番今の状況に似あう。

隣にいる彼を見ると顔が青ざめていた……きっと自分もこんな感じになっているだろう。

そんな彼は俺の目線に気付いたのかこちらを見て

「なあ…零時」

「ああ…言いたいことはわかるぞ一夏」

彼の名前は一夏、織斑 一夏だ

世界で一番最初にISを動かした男だ

そして俺が2番目、正直今はココに居るのを一夏のせいにして殴りたい

そしてここはIS学園、入学してから初めての教室入りだ

まさかこんなにキツイとは思わなかった…

え？きついって？そりゃ好奇心と物珍しさにこんなに見られたら自分が動物にでもなったようであまりいい気分ではないのだ

それが積もり積もって精神的ダメージへと変わっていったのだ

今までこんなに注目されたことがなかっただけに今の状況はキツイ

でも！俺は逃げない！

俺は今回を機に”もう一度変われるように努力してます”と一方的にとある天才ウサギに約束したのだから逃げるわけにはいかない。

「わかるよな…でもやっぱりこれは」

一夏は苦笑いをしながら言う

一夏は基本考えてることが簡単にわかるようなタイプなのだが今回はそんなこと関係ない

「ああ・・・これは」

「きついな・・・」

そんな俺たち二人を救うように教室の扉が開き

一人の女性が入ってくる、その女性は教卓の所に来ると

「みなさん入学おめでとうございます、私はこのクラスの副担任の山田真耶です、これから一年間よろしくお願いしますね」

につこりと微笑みながら挨拶をした山田先生

しかし教室は俺と一夏に注目されていて反応がない

「……………」

ついに微笑みながら汗をかき始めた山田先生
ついでに顔も青ざめてきているではないか

「そ、それでは自己紹介でもしましょうか」

何とか復活？をして話を進めていく

そして1番の相川さんの自己紹介が終わり

「次は安部君ですね」

ちなみに二番ならば相川さんの後ろ

廊下側の前から二番目にふつう席なるはずだが

俺と一夏は出席番号順になると離れるので唯一の同性なので隣に
てほしいと言い教卓の前にしてもらった

席を立ち後ろを向き

「安部 零時です みんなとは歳が一つ違うが基本どんな話題でも
構わないから気軽に話しかけてくれ 一年間よろしく」

うまくはないだろうが下手でもない自己紹介はできたと思う
まあ最初はこのくらいぐらいだろ

「織斑くんっ！織斑一夏くんっ！」

「は、はい！」

おっと いつの間にかお行まで進んでたか……
あとでしっかり顔と名前を憶えないとだな

それにしても一夏……お前自分の番が終わってないのにばーっとし
てたのかよ

ああ……いやたぶんこの独特の緊張感で頭真っ白になってたんだな

裏声なんか出すからクスクスと笑われてまでいる

「あつ、あのごめんね大きな声出しちゃって。怒ってますか？ごめんね、でもあ行から初めて今お行で織斑くんの順番なの、だから自己紹介してくれないかな？」

ふむ、この先生はどうも腰が低いというか……まあ、きっとそれがこの先生のいいところなんだろうな

「す、すみません。緊張してて……自己紹介ですよ？わかりました」

そこで立ち上がり俺と同じく後ろを向いてクラスメイトと目が合うような感じになる

一夏が「うつ……」と怯んだ気がしたが……気にしない

「えっと……織斑 一夏です、よろしくお願いします」

ああ……一夏俺より少ない自己紹介はまずいぞ……ほれ、クラスメイトたちのあの目「もう少し何か教えてくれないかな？」目線だ……まあこれを避けるには直ちに座ることが要望に応えることだな……

「すうゝはあゝ」

おっ！深呼吸したってことはなんか言うつもりなのか？！ いやないな、うん 少しの付き合いだがそれくらいはわかる
おっ！千冬さんだ、一夏気づいてないってことは

「以上です！」

スパーン！

うむ、いい音ですな　まあ弟のあんな自己紹介見たらああなるよな

「イツツ！」

頭に手を当てながら後ろを振り返る一夏

「ち、千冬姉！？」

スパーン！

「織斑先生と呼べ馬鹿者、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな山田君」

「いえいえ、副担任ですからこれくらいはしないと……」

ふむ、織斑家に滞在したときは千冬さんを見ていたときは「この人職場で大丈夫かよ……」と思ってた

スパーン！

「イツテ！なんで一夏じゃなくて俺が叩かれなきゃいけないんだよ千冬s……先生」

先生って言ったんだこれで叩かれないだろう

「……し、失礼なことを考えた罰だ」

ふむ、どうやら千冬先生というのは大丈夫みたいだと、というか人の心を読まないでほしいしこれで赤面してたらかわいいのに……

スパーン！

「ふん！」

だから人の心読まないでほしい……
いやこれはもしや俺は……一夏同じでわかりやすいタイプなのか？！
これは気を付けないとだな、うん

「諸君！私が織斑 千冬だ。君たち新入生を使い物に育てるのが私も仕事だ。」

「「きゃ」「」

ん？

「「「キャアーーーー！！！！」」「」

うをい！

なんだなんだ！変質者でも出たのか？！

「千冬様よ！本物の千冬様よ！！」

ああ…なるほど

つか本物じゃないのがいるみたいな言い方だな、おい

まあそれからは千冬さんを褒め称える？内容が続き

「静かにしろお前たち……まったく…何故私のクラスにはこうも馬鹿どもが集まるのだ…まあいい、お前たち！私の話はよく聞け、わかつたら返事をしろわからなくても返事をしろ」

「はい！」

こうやって千冬さんのしも……ゲフンゲフン！
あぶない、また叩かれるところだった

それから1時限目が始まるぎりぎりまで自己紹介が続き1時限目が終わった

そして今は1限と2限の間の休み時間なのだが……

今このクラスに一夏はいない……先ほどポニーテールの子に連れて行かれた……

と、いうことはだ……このクラスには俺しか男がいない
誰でも良いから……助け

「うんうん！じゃ私が助けてあげようかレイちゃん？」

ああ……しまった……こいつも人の心が読めちゃうやつだった

さて……ここに至るまでの事でも考えて時間つぶすかな

01（後書き）

やっと進んだって感じですよ……

02（前書き）

オリジナルです

男がISを動かしたことにより世界規模で行われたIS適性の検査、男だけに用意された検査

3月に行われ始めた検査

それは小学生から大学生までの年齢限定でIS学園で行われたこれは平日に行われた義務付けられたものだった

今日の午後から藍越高校1年生の番だった

今は俺のクラスの番

検査方法は単純、Suicaのようにタッチして通るだけ

うん、単純だ

そしてこの検査は小学生から中学生までの終わっており成果はない

「なあ零時……授業がつぶれたのはいいがつまんないよな」

午後からと言ってもほかの学校もいるから時間がかかっている

そして俺の前に並んでいる相沢巧あいざわ たくみ彼と俺は幼稚園からの幼馴染だ

しかもこの幼馴染、何でもできるイケメンだ……くそう……平均的な俺とは大違いだ

「だよな、周りの学校の連中もやる気がないのが見て取れるな、それにISが使えても得をするとも思えないしな……実際織斑一夏がモルモットになったって噂だってあるんだぞ？」

俺がそんなことを言ったら

「なに?! 得がないだど?! 嘘だ!! しかし、ザ! 平均のお前が言うつてことはそれが世の中の意見だというのか! だがしかし俺はそれ乗り越えてこそその意味があると進言する! 男子ならば女の子いっぱいの中で過ごしたいと思わないのか!? その夢を叶えてくれるのはIS学園だ! だからこそISを動かして俺はIS学園に入つて見せる!」

そんなことを大声で言う巧

おいおいモルモットになるのを乗り越えるつてバカだろ なんて思っていたら

オオ~~~~!!!! パチパチパチ!!!!

拍手喝采

その通りだ! とか、俺たちが間違っていた! などさっきのやる気のなさから一転目に炎が見えそうなテンションになっている もはや検査会場(第三アリーナだっけな)にいる男たちの心は一つとなっていた

「こら! そこ! 喋つてもいいがうるさくはするな!!」

怒られた?

なんか今のは微妙な怒り方だったな

まあそれよりも

「男つて単純だな……おい」

「何を言うアベレージこと安部零時くん……この会場はもはやロマンを求める者しかない。すなわち今となっては今の状況こそ平均的になったのだよ……ふふふふ！ふあっはっはっはっはっは！」

高笑いを始める友人、この友人は世間で言うオタクの部類だと思う携帯のストラップは今は確か「まよチキ！だ！男装執事って素晴らしい零時！」と言っていたはずだ 他のものをつけていたときも「みんなも読むがいいぞ！」とか宣伝していた

まあここまでは別に人の趣味だし自分が面白いものを面白いと言っ
てはいけないうんてこともない

実際俺もこの相沢こと奴に毒されオタクの部類に入っていた

そして奴が面白いと言えば面白かったとクラス中が言う、まあこれも情報共有の範囲内だ、だから別に何も言わん

しかしだ！奴があればアニメ化する、でも2期はやらないとか宣言……予言めいたことを言い出すときは凄

なにが言いたいかというと奴の発言は 言ったことが絶対ではない
が大体当たる

これはうちのクラスの共通認識だ
この

そんな相沢こと奴がこんなことを言い出した

「そして！平均と半分をステータスにしている零時は必ずISを動かす！ 本当ならば俺が動かしたいがまあ俺は無理だろうな……俺と変われ！」

は？何を馬鹿なことを。

「おいおい、いくらなんでもそれはない、お前の言い方だと男がISを平均か半分使えてないとダメな計算だぞ。今回ばかりはお前の予言の外れたな」

「ふっ！ならば賭けでもしようじゃないか零時」

「鼻で笑いやがって……良いぜ！その賭け乗った！それで賭けは何にするんだ？」

「なあに簡単だ、俺が勝ったときお前はIS学園にいる……そしてあそこには我が妹がいる！つまり！我が妹、相沢悠とデートせよ！」

相沢悠……巧の双子の妹で、美人……かわいい系ではなく美人だ、伊達にイケメンの妹じゃないと思う
それにスタイルだって申し分ない

しかし今の俺は冷や汗をかいている……俺は悠に好かれている、なぜかは知らん

本人に直接聞いたら「人を好きになるのに理由が必要なのかな？」と質問を質問で返してきた

俺は悠が苦手だ、何でもできるからだ

今の時代女尊男卑……男ができる奴なのは構わないが……女子ができる奴だと抵抗ができる

きつと俺が考えている「世の中の男のもそう思っているのだろう別に悠の事が嫌いなのではない……むしろ自分に不釣り合いで悠に悪くて俺から壁を作ってしまったている

前に巧から「我が愛しの悠を避けるとは！」と説教をくらったとき「お前……なんで悠に壁を作るんだ？好きな奴でもいるのか？」と聞かれたとき俺は「好きな奴はいない。壁は……気まずいんだ……好きじ

やない事に申し訳なくてな……それに好きじゃないとはつきり答えて悠があきらめるか？」と答えた

奴は「むしろ好きになるまで愛してあげる、と言っな」と答えた、いや予言しやがった

その後日「お前の気持ちは嬉しいが……」と俺はハッキリしないへたれ根性で悠に言ってみたら「好きな人がいるわけじゃないんだよね？じゃあ大丈夫！むしろ好きになるまで愛してあげるよ」と、とびつきの笑顔で答えた

ちなみのこの笑顔にドキッとしたのは内緒だ

この後の悠は凄かった……今まで人目や場所を選んでの行動をしていたがその日を境に無くなった

正確には人目のある場所では何もなかった、が！

俺以外には気づかないようにしながらスキンシップをしてきたりするようになった

え？具体的なスキンシップの内容を教えろ？ご想像にお任せしますw

「おい、戻ってこい零時！」

体を揺さぶられ意識がはつきりする
そうやらいろいろと考え込んでしまった

「お、おい待て！悠関係は今関係ないだろこのシスコン！やめてくれ！た、頼む！な！」

「はっはっは！将来の義兄をシスコンと呼ぶか義弟よ」

くそ！このシスコンが！

「さて零時。お前は俺に何を賭けさせたいんだ？内容が内容だからな、なんだっていいぞ」

こいつ…目が本気だ。このシスコンが！
そっちがその気なら俺は！

「俺が勝ったらオタクやめろ」

こつえばこいつはこんな賭けやめるだろう

「キサマアアアア！！！！！！俺を殺す気か！俺という存在を消したいんだな！そうなんだなあ！！！」

いきなり胸倉をつかまれガクガクされたが、「そうなんだなあ！！」の後に電池の切れたように止まった

「良いだろう！我が妹のためだ！それで良からう！」

「なに？！そんな馬鹿な！お前がオタク精神を賭けるような馬鹿なことをするなんて！」

「これこそが我が妹への兄妹愛なのだよ！悠がIS学園に行き……この一年間……お前の行動を伝え続けてきた……」 「なに……！！！！なんてことをしてくれたんだ貴様……！！」

「俺も、もう疲れちゃったのさ……」 「ちょ！そんな事良いから悠に一体なにをいつt」

「こらそこ！早く検査して……！！」

話しているうちにいつの間にか自分たちの番になっていたくそ！今は検査よりもこっちが大切だってのな！

「ふっ！先に言ってるぞ零時」

そっついながらIS（確か打鉄とか言ったかな）に向かっていき、手をISに触れる巧

「ふむ、俺には動かせないようだ。さあ零時！お前に出番だ！お前なら必ず動かす！」

そんなことを大声で言う巧

そのせいか周りは俺に注目していた

「無理に決まってるってのな……」

俺はそっついながらISへと手を触れた

何も起きない

「俺の勝ちだな巧」

ISから手を離し、すでにISから離れていた巧の方へ向かおうとする

周りの期待していた連中からの注目もなくなった

「まあちよつとまで、もう一回触れてみる。検査官ももうちよつとだけ待ってください、次は動かしますから」

と、強引に俺をISに触れさせる巧

「お、おい巧、何すんだよ」

「零時！」

いきなりまた大声を出す巧
これでまた注目の的だ

「な、なんだよ」

「地球上の男女比は？」

は？何を言い出すんだこいつは？

「わかるわけないっての」

「単純に考えてでいい」

「そんなの半分半分じゃないか？」

「そうだ零時！難しく考えなければ普通半分半分だと考える！じゃあ次は地球上にいる女性はISを動かせるよな？」

「まあ織斑一夏を含めなきゃな」

「じゃあ地球上にいる人類の半分の人！はISを動かせるよな？」

「ああ人類って考えるなら半分の人！はISを動かせ！……！！！」

俺の頭に何か入ってきた

本来ならば今「動かせるな」と言おうとしてたんだ

でも言う前に手を触れていたモノ、ISから何か……いやISについてISからISを教えてもらった、というのが正しいだろうな

今ならわかっている俺はこれを動かせる

さっきは動かせなかったのに今は動かせることまでわかっている

クソ！嵌められた！

クソ忌々しい友人を見てみると

「はっはっはっはっ！！！友よ！賭けは俺の勝ちだな！人類の半分は動かせると思った時点で俺の勝ちなのだ！わっはっはっ！」

クソ野郎！俺よりも俺を理解してる奴なんて嫌いだ！

「おっと、今自分よりも自分を理解してる奴なんて思ったな？残念だが俺はお前が本当に動かせると思ってなかったさ」

「はあ？！お前だってさっきまであんなに自慢げに言ってたくせにか？！」

「ああ、お前が動かせると言ったのは悠だ「きつとレイちゃんの平均と半分はレイちゃんがそれでいいと諦めてるからそうなんであつて、きつとその考え方さえ変えてしまえばレイちゃんは何でもできるはずだもん」だ、そうだ」

「意味が分からんな……それとISとは関係ないぞ」

俺の平均と半分

それは安部零時の特殊能力と言って良いほどのものだ

実際にそんな能力とかがこの世界にあるわけじゃないが、俺のすることなすことが平均と半分なのである

例えば百点満点テストの平均点が60.5点 なら俺は61か60点だ

例えば百点満点テストの平均点が20点ならば俺の点数は平均点の20点 または半分の50点になっている、この場合はどっちにな

るかわからない

「お前の平均と半分はお前の気持ち次第で変わってくるって事だ、まあそれは後で聞かせてやる。それよりも早く負けを認めて動かして見たらどうなんだ？ん？」

クソむかつく態度だ

でも負けを認めないのも男として気分がよくない

そう思い俺はISを動かしたのだった

まったく……どうしてこうなったんだか……

02（後書き）

オ、オリジナルって難しい・・・

03 (前書き)

瑠璃のHPが1になった……

PV&ユニークを見た

HPマアアアックス!!!!!!

ISを動かした……ああ動かした

今、会場は静か、いや……ざわついてはいるがどう反応していいかわからないでいる。これは検査官も同じだ

あたりを見回す、というより前を向いていても360°。周りが見渡せている

しかし、今の俺にとっては目の前にいる相沢巧さえ見ればいい

「そんなに睨むな零時、わるかったさ」

言葉・表情・態度から謝っている普通ならとわかる

しかし今俺はISを装着しているんだ

表情・声からしてこいつは本当に謝っていないと素人でさえわかってしまう

「なるほど……こりゃ最強にして最悪の平気だな、IS装着者に嘘はつけないようだぞ巧」

「別に嘘だとばれて構わないさ、賭けさえ守ってくれるならな」

こいつ楽しんでやがる！

「わかってるさ……わかってるっての」

「くつくくくつwでは悠に教えてやろっ」

携帯を耳に当て

「頼むー！！お願いだあーやめてくれー！！俺の理性をぶち壊す気が
！！！！」

「ふむ…まだそんなものがあつたのか……もつと過激に攻めた方が
良いようだと思はれておこつ。おお、悠か？」

俺のお願い何て無視で電話を始める巧

「アツ~~~~~！！！！」

大声を出して邪魔をしようとする

「お前が言つた通りになつたぞ。……………ああ、あと零時がデート
してくれるそうだ。……………うむ、義弟ができるのを兄は楽しみにし
ているぞ悠。……………ああ、ではまた」

携帯を閉じてこちらをニヤリとみてる

そんな……そのまま話が終わってしまうなんて

「さあ諸君！検査を続けるといい！検査官は零時の対応を学園に訪
ねてくるといいと思われる！」

パン！つと手を叩くと再び周りが騒がしくなってきた
お前どこの政治家だ！むしろお前がなつてしまえ！！！！

「さて零時、もうISから降りていいんじゃないか？」

「ん？ああそうだな」

動かすときにISに教えてもらった？方法で降りる

「はあ……俺……どうなるんだろ……」

そんなことを誰に言ったわけでもなくつぶやくと

「まあモルモットじゃないか？」

「チキシヨ〜〜！！泣いてやる！！いやその前にお前を殺してやる
〜！！くそ〜！！」

「まあそういうな、俺はお前は上を目指せるはずだと思っている。
なぜかはハッキリしてないが……お前は本当ならば平均と半分に縛
られてるとは俺は思えないんだ、長年一緒にいたがわからなかった、
すまない零時」

突然真剣な顔をして謝りだす巧

「お、おいおい、いきなりどうしたんだよ」

「真剣な話だ。俺はお前が好きだ。もちろん俺は友人としてだ、ま
あ悠は違っただろうがな。どちらにしても俺の……俺たち相沢兄妹の
初めての友だからな。……だから俺たちはお前に恩返しをする
んだ」

「なんだなんだ、最後の方聞こえなかったぞ？つか一番最初がたま
たま俺だったただけだぞ」

「まあ気にするな」

何やらあきれた顔をして見てきているが何故だかわからんな

「君が安部 零時か？」

突然後ろから名前を呼ばれ後ろを見る

「ほう、引退した後のここにいると悠が言っていたが、まさかあなたが来るとはな……」

そこにはスーツの似合う女性が立っていた

ああ、俺もこの人がここにいるのは悠からメールで聞いていた……

悠はISにあこがれているからな

ISが好きでIS学園に入れるよう頑張って勉強してたし

ま、そのおかげで俺は受験勉強中は悠を気にせず過ごせたのだから

「お前が相沢兄か…まったく私の授業中に電話するとはな…そのおかげでココに早くこれたのだから」

「いつも妹がお騒がせしています」

ぺこりと頭を下げる巧

「いや相沢妹が問題…というか騒ぎを起こしたのは今回が初めてだ。むしろほかの生徒と違い私が気兼ねなく話せる相手だから助かっている」

「それは良かった。それで…織斑 千冬さん…いや先生、零時の事できたのですか？」

このスーツ姿の女性は織斑 千冬
おそらく織斑 一夏の姉であろう

「それ以外に何かあるというんだ、君が安部零時だな？」

睨まれている

いや、きつと睨んでいないのだろうがこの人に見られていると自然と背筋が良くなる

「はい、俺が安部零時です」

「そうか…… ISを動かしたんだな」

頭を縦に振り肯定する

「君はこれからこの IS 学園に通うことになるだろう…… いや通う
しかないだろう」

ああ…… 学園行き決定なのか

「そして君は来年二年生だ。そして織斑一夏は来年入学……つまり一年生だ。正直 IS について何も知らない人間がいきなり二年から初めて何もわからないまま終わるだろうな」

「ええ、IS も起動方法とかを感覚的に教えてくれただけで理論とかを教えてくれたわけではありませんから」

「そこでだ、私は一年から IS 学園に通うことを進める」

一年から……つまり留年していることと変わらない

「親と……親と話したいですね。もしかしたら IS 学園に行くことを

「反対されるかもしれませんが」

「そうか、だが親御さんにはもう連絡はして本人の意思に任せると言われている」

「おおおう！仕事が早いな」

「なら俺は一年からやらしてもらいます。一年からなら織斑一夏もいるだろうし少しは過ごしやすいだろうし」

「そうか、そうしてもらえるとアイツの姉として安心できる。」

姉…やはり姉弟だったのか

「ああそれとお前は何でもできるそうだな」

なんでも……ねえ……

「そうだな、零時は何でも平均的にできるな」

「なんでもはできないっての、平均的にできるだけだよ」

「それより先生、零時はもう帰っていいのでしょうか？」

俺は無視？！ねえちょっと巧さん？！

知ってた、無視って辛いんだよ？！俺はいじられキャラじゃないんだから！

「ああそのことが、安部お前うちに来ないか？」

うちに来ないか……まるで友達を誘うような軽さで言いますね

「えっと、なぜそうなるかわからないんですが……」

「お前はこれからTVで大々的に発表されるだろう、そうするとマスコミなどが家まで押し寄せるだろう。」

まあそうだろうな、でもしかしそれって

「それは先生の所も同じなのでは？」

これは巧が言った

「それにまだ俺学校ありますし……」

これは俺

それと学校帰りに他人の家に行くのはあまり好きではないのだ
せめて着替えてから行きたいものだ

「幸い私は顔が広くてな、私の家にはマスコミは少ないだろうな。
学校については何かしか学校側から発表があるだろう」

少ない いないが一番の理想だが仕方ない
学校は……面倒だ、としか言えない

「まあ俺は構わないかな、むしろ織斑一夏と先に交友関係を築いて
おけるのはありがたいし」

もしクラスが違った時でも先に知り合いなら困らないしな

「なら決定だな、私はこの後職員室に戻って荷物を取ってくる。お前は校門で待っていてくれ」

「え?!今からですか?!授業は?!つか今日からなんですか?!」

「今日からの方がいいだろうな。仕事は副担任のものに任せてある大丈夫だ」

うえいwお仕事がお早い人だなw

「荷物は相沢兄に届けてもらうのがいいだろう」

「と、言うことは俺もついていくんですね」

なにか巧を巻き込んでしまったようだ

「なんかすまんな巧」

「良いつての、友達だろ」

そう言いながら悪友が笑う

まったく、最高のともをもったものだ

03（後書き）

HPが半分減った

レベルが1上がった……特に意味がなかったw

今回ggdgdでした…ええ自分でよくわかりました…

負けてたまるかあゝゝゝ!!!!!!

吠えたことによりHPが減った……ぐはっ！

あの後にはモノレールとか電車で織斑家へとたどり着いて意外と家が近いことに驚いたんだ

まあ藍越高校に通うために受験会場行っただけだったって一夏から聞いたしな、そりゃ案外近いし

聞けば中学は実は一緒だったらしい

まあそんなこんなで「レイちゃんってば」家についてからも大変だ……？ん？俺はそんな家には言っていないぞ？

「えへ？私を無視するレイちゃんにはキ、キスをしてあげます」

ああそうだった……俺は現実から逃げているところだった……それよりも今は

「こら悠、何をしようとしているんだ」

「何ってキスだよ、そのあとは行けるとこまで行こうと思ってました」

元気よく手をあげながら宣言する

まあ悠は巧と違って宣言したって大丈夫だがな

しかしこいつレベルアップしたな……1年会わないでこんなにも

「成長するなんて？」

腕を組んで胸を強調させてくる

ゴクリッ！た、確かにデカくって何をやってるんだ俺は！

「人の心を読むな悠」

「大丈夫だよ、レイちゃんにしか使いたくないし」

「俺にだって使うなつての……」

「だって女の子しかいないから大丈夫かなって心配になって確かめてたら私の胸の成長を確かめてるし、まあ他の子が見てたら切っちゃうんだけどね」

手をチヨキにしてハサミのように動かしている
何！何を！ナニを切っちゃうんですか？！
慌てて息子を手で押さえる

「冗談だってw」

wじゃねーし！マジでビビったわ！

「まったく、ある意味疲れた……でも助かったぞ悠、お前と話したおかげで大分楽にはなったしわざわざ学年が違うのに来てくれたんだろ？ありがとうな、それと久しぶり」

「えへ、久しぶりだねレイちゃん。もうちょっと話したいところなんだけど次の授業始まるから行くね」

「ああ、またな悠」

そう言って教室から出て行こうと扉までいくとこちらに振り返り

「私今日はISの授業で放課後までこれないんだ、だから放課後はこの教室で待っててね」

言うだけ言って返事を返す前に教室から出て行った悠

「まったく…毎回来るつもりだったのか」

キンコーンカーンコーン

おっと、2時間目の鐘がなったな

隣の席を見るとまだ一夏は帰って来ていない

と、一夏と一夏に声をかけた女の子が帰って来た

俺は席に着く一夏に対して

「あの子お前の彼女か？」

「違っつて幼馴染だよ」

ギロリ！

おおおw睨んでるwあの子めっさ一夏睨んでるwこれは楽しくなりそうだw

「くすくす、一夏あの子めっちゃ睨んでるぞ」

後ろを向く一夏

「ええ！ちょ、なんでだよ篤」

立ち上がり女の子に抗議する一夏
ふむ、彼女は箒って言うのか
ちなみに一夏……今立つとだな

パンツ！

「席に着け織斑」

「……わかりました」

くつくつくwたのしくなぁw

パンツ！

「だからなんで叩くんですか？！俺なんもしてね〜！」

「いや……女の匂いがしてな……まあ気にするな……」

「理不尽だ！！！！」

「さて授業を始める、山田君頼む」

「無視？！無視なの？！無視」パンツ！

「うるさい、静かにしろ」

「……ヤ」

「——であるかにして、ISの基本運用は……」

眠い、内容がわかるだけに眠い……もう、寝てもいいよね？

「あ、あの阿部君、織斑君、私の授業つまないでしょうか？」

ん？一夏……お前も眠いのか

「いや……先生のつていうか内容が内容だから眠いんですよ」

俺の意見に同意するようにうなずいている一夏

ゴン！ゴン！

「ぐはっ！」「」

ゲンコツがきた？！出席簿じゃなかった？！

「誰が正直に言えといった」

「ええ、だってあの天才ウサギに徹底的に教え込まれたんですよ」

「俺は零時から復讐を込められて、いやいや教えられたし」

当たり前の復讐だ、一夏が動かさなきゃこんな難しいこと覚えすんだからな

「それでも授業はちゃんと受ける、それともお前たちが授業をしてくれるのか？」

「いえ、滅相もございません」

「ならちゃんと聞いている」

「了解」

→一夏

「ヤー」

→俺

「そついやなんで零時ってヤーって言うんだ？」

「ゲームで染まってそのまま気に入ったから使ってる、結構ミリタリー要素あつておもしろいぞ。他にも面白いの知ってるぞ」

「へー、なんてゲームなんだ？」

「BALDR。。。シリーズだ、まっ18禁だがな」

パンツ！

「没収だ」

「男の子を殺す気?!」

「没収だ」

「うさぎにもう没収されてる」

「初めて友人を褒めたい……」

うは、そんなことで初めて褒めるんかい

「まあいい、とりあえず話は聞け、お前たちは玩具ではなく兵器を扱うことになるんだからな」

そうだ、IS兵器だ

協定とか条約とかで結局競技をするため、とか言っているが軍事ISがあるって噂もある

そして俺たちはそのISを扱っていくのだ

「ええ、わかりました」

気持ち切り替えて聞かないとな

「……それでいい」

そして二時間目の昼休み時間

「へ？」

おっと、金髪少女だ

ふむ、悪くない

一夏が知り合い？みたいな顔をしてくるから首を振って否定した

「なんだ、何か用事か？」

「まあ！なんですのそのお返事、わたくしに声をかけられるだけでも光栄ですよ」

訂正が必要だ、全然よくない
ゲーム内以外ではあまり関わりたくないタイプだ

「光栄ねえ…… お前より千冬先生に声をかけてもらう方が光栄だね」

「そうか？」

「お前にとっては姉だからそこんところの感覚は薄いかもな」

「そうかも、それと悪いけど俺たち君の事誰か知らないんだ」

知らない奴に声かけられて「光栄です！」ってなる方が頭おかしい
だろ普通

「まあ！わたくしを知らないんですの？！イギリス代表候補生にして入試主席のこのセシリア・オルコットを？！」

ほゝ、候補生か

つてことは専用機持ちかな？

「お前候補生つてことは専用機持つてんのか？」

お、一夏ナイス

「ええ、もちろんです。国家代表IS操縦者の候補生の選出されたエリートなのですから、本来ならば私とクラスを共にするだけで幸運ですよ」

腰に手を当て胸を張って答えるセシリアだっけ？

「そうかそうかよかったよかったー」

よし適当に流そうw

たく…今になって二年に行けばよかったと思うぜ
なんか悠のありがたみがよくわかる瞬間だぜ

「馬鹿にしていますの」

しまった、流せないタイプだったか

アイコンタクトで「おい、一夏何とかしろ」と一夏に伝える

返事は「無理無理」だった

くそゝ、なんでこんな時来ないんだよ悠！！って授業で来ないって

言ってたな

「大体ちよつとISの事を知ってるだけでよくこの学園に入れましたね。男でISを使えると聞いていましたから期待していましたがに期待外れですわ」

「俺たちに期待されてもなあ零時」

こつちに話し振るなバカチン

「まあゝな」

「まあ私は唯一教官を倒したぐらい優秀ですからわからないことがあれば聞いてください」

唯一ねえ…

「おい一夏、お前も教官倒したんだろ？」

「いや倒したっていうか勝手に負けてくれたって言うか……」

「は？」

おおw美人のアホすらw

まあさつきまで馬鹿にしてたやつが自分と同じって言うんだから驚きだよな

「あなたも教官を倒したっていうの?!私だけと聞きましたか？」

「女子ではってことじゃないかな？」

「あなたもですの！？」

今度は俺か…だが俺は

「俺はそもそも入試試験をやってない」

そんな俺には興味がなくなったのかまた一夏の方を向く

「あなたも教官を倒したっていいですね！」

「お、落ち着けよ」

「これが落ち着いて」キーンコーンカーンコーン

ジャストタイミング！助かった

「またあとできますわ！」

おいおいまたくんのかよ…悠に助けてとでもメールしようか……いやそのあとが大変そうだ

04（後書き）

「ばっかになってしまった………どうしよう

ちなみにISにはいろいろなものから武器名とかを引っ張ってきて
皆さんにわかりやすいようにするかもしれません

内容はネタはだしてもクロスは多分しません

05（前書き）

遅くなりました（泣

しかも短いです（汗

グダりました（困

ではどうぞ（w

「それではこの三時間目は各種装備の説明をする、が、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

クラス対抗戦？代表？

理解した、めんどくさいんだな
よし、俺は絶対にやりたくない

「クラス代表とはそのままの意味で、対抗戦だけじゃなくて生徒会の開く会議や委員会への出席もしてもらう。ちなみに決まると一年間変更はないからそのつもりで」

よし、さらに面倒なのはわかった

「自薦他薦は問わない、他薦された者に拒否権はない」

拒否権がないだと？！
ならば先手必勝！

「はい、先生！セシリア・オルコットを推薦します！」

そしてクラスメイトに向けて殺気……目で威圧する
これできっと！大丈夫だ！

「はい、俺は零時を推薦」きさまああ……！！！！」「うおっ！な、なんだよ零時」

ああ……やってくれた……

まさかこんなところに裏切り者が……
なぜ、俺は…一夏どうしてこうも……

「なんてことしやがる一夏！貴様！貴様あゝ！」

「くそ！なら俺は一夏を推薦します」

「えええ、お前こそなんだよ零時」

「うつせ！お前が悪い」

Bannon！

「待ってください、納得がいきませんわ！」

先ほどの音は机を叩いて立った時の音のようだ

「うるさいセシリア・オルコット！どうせ俺たちがクラス代表が気に食わなくて……違うか…男が代表になること自体が屈辱とかどうせ思ってたろ、んで実力の高い自分になるべきとも思ってたろ」

まったく……今どきの女子だ

俺は高校はいるまで会ったことがなかったが今の女子は、ISが使えるのは女子…女の子って偉い……って思考だ

「ええそうですね、わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来たのであつてサーカスをしに来たのではありません、だいたい文化としても後進的な国で暮らさなければならぬこと自体苦痛である——」

「イギリスだって大してお国柄ないだろ、世界一まずい料理で何年覇者だよ」

お、一夏も参戦してきたか
口が滑ったみたいな顔してるし

「あ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの？！」

「お前バカだろ、先にそっちが馬鹿にしてきたから一夏も怒ったんだろ。それともついさっき言った自分の言葉さえも忘れたのか？」

Bannon!

そのいちいち机叩くのやめてほしいわ

「決闘ですわ！」

「おう！四の五の言うよりわかりやすい」

一夏も勝手に決めるな……

ふむ、これはもしや負けたらプライドが…勝つと代表になってしま
うってところか……わざと負けるか？いやいや、仮にも年上……負
けるわけには……というかこのまま空気になればきつと俺は戦わな
いですみそうだな

「言うておきますけどわざと負けたりしたら奴隷にしてあげますわ
！」

それは前に二文字つく奴隷ですか？

「そんな事わかってる」

「さて、そろそろ良いだろう、勝負は一週間後に第三アリーナで行う。織斑・安部・オルコットの三人はそれぞれ用意しておくように」

「えっ?! 俺もですか?! 一夏たちが勝手に決めた事じゃないですか」

「束との約束を果たすチャンスじゃないか、それにお前の腕についているそれは飾りか?」

そう言って千冬さん……千冬先生は俺の両腕についているリストバンドを見てくる

「んゝ、でも使っなくなって千冬先生が言ったから使ったことないし……でもずっと着けてるって言っし、つか隠しとけとも言ってませんでした?」

このリストバンドは貰いものだ、くれた本人は「はいこれあげる、レイちゃんが本当に変わりたいと思うなら使うといいよ。こっちは青の方は君のPCの中身にあったゲームを参考にしてるから特に説明はいらないね、こっちの紫の方は……まあレイちゃんが私に約束したことを守っていたらきつとこの子が教えてくれるよ」と言っていた

「IS学園は特記事項があるから国・団体が関われないからな、ここでなら多少なら構わない。それにそれは現行あるコアではなくお前のためにあるコアだからな、467のコアが469になった報告もしなければならんだ」

ふむ、外でそんなことあったらコアを持っていかれそうだしな
俺の憧れ、俺を応援をしてあげると言ってくれた人からもらったも
のだ

渡すわけにはいかなかったから助かった

「腕試しと思ってやってみる」

「わかりました」

ん？今気付いたが教室がざわついてるな

「聞きたいことがあるかもしれないが後で聞け、では授業を始める」
なるほど、コアが増えたゝみたいな話したから当然の反応か

授業が終わった休み時間はセシリア・オルコットからの質問攻めが
すごかった

「あなたも専用機持ちだというのはですか？！」とか「なぜ二つも？
！」とか……おっと何故二つとかの説明しなかったな

なんか俺の前でまだ質問を言ってるし……俺が答える前に質問するなっの

さて……現実逃避するかw

ついでにこのリストバンドの形をした待機状態のISをもらった時の話を思い出すか…

そうそうあれは、俺が一夏の家に泊まりが決定して親に「平均の前が……頑張つてこいと」微妙なことを言われながら応援された次の日だ

朝起きて飯食つてゆったりしてた時だ　ちなみに俺は学校を休んで一夏は自由登校だったから家に居た、千冬さんも今日は休みを取ってくれて家にいた

ピンポーン！

織斑家のインターホンがなり一夏が玄関向かった時玄関から

「やつぽー！ちーちゃん、いっくん久しぶり」

かなり注目を浴びるような服装をした女性が無断侵入してきたのだそのあとは一夏と千冬さんの昔からの知り合いで、とか紹介をしてもらい

その女性の名前を聞いて驚いた

「挨拶をしる束」

「えええ、しょうがないなあ…私が天才の篠ノ之束さんだよ」

簡単な挨拶だった

しかしこの人がISを作った人だとわかったのは驚いた

「君がいつくん意外にISを動かせる子かな？」

「え？あ、はい、安部零時って言います」

「ふーん、どうして君はISが使えるんだろうね？だから君の事を少し調べさせてもらたよ」

何がだからなのかさっぱりだ

しかも千冬さんと一夏は俺と篠ノ之さんを見比べて驚いている

「君は面白い体質みたいだね、ここまで平均的だなんてすごいね。でも君は小学生の低学年は普通…むしろ成績が良かった方なのに年齢が上がることに平均的になっていったね。なにか理由があるのかい？」

「小学低学年……」

はて…何かあったかな…

ピンポーン！

む？またお客さんか？この家には良くお客さんが来るようだ
一夏が玄関に向かって行った

「今日は多い方だ、おそらく相沢兄ではないのか？」

また読まれただど?!千冬さんは人間なのか?!

すると玄関から

「おゝい零時〜、荷物持ってきたぞ〜」

よく知る友人の声だ

「せっかくだ、用事がないならば上がってこい」

千冬さんがリビングから声をかける

「んじゃ、おじゃまします」

やはり来たのは巧でまた自己紹介をした後

「本当に何か心当たりはないの？」

と、先ほどの質問をまたされた

「ん〜……ない……ですかねえ」

むしろ覚えてるならこんなことにはなっていないだろう

でもなぜかこう頭に……モヤがかかってハッキリしないが何かあった
ような気はするが……覚えてないということは大したことではない
のだろう

「ん？どういうことなんだ零時？」

そうか、巧はいなかったんだ
そこで聞かれたことを教えると

「……………篠ノ之博士、少し二人でお話ししませんか？」

「イヤだね」

なんと?! 即答だ?! このイケメンのタクミンが女性に断られる
ところを俺は初めてみた!

しかし同時に巧のこれほどまでに真剣な顔は初めて見た

「では零時への質問はやめていただきたい」

おいおい、ドスのきいた声出すなよ

「というか何故お前が決めるんだよ」

「黙っている零時」

「はい」

情けないぞ俺! !こ、ここここ怖かったわけじゃないんだからね!

「君は何か知っているの?」

「ええ、知っています。零時は覚えてないだけ…そう覚えてないんだ……」

「じゃあ少し話そうか、外…でいいかな?」

「その方が助かります」

そう言つて外へ出て行つてしまつた

「……ちょ！本人の俺に教えてくれたつていいじゃないか?!」

「それにしてもあの束がな……昨日話した時から興味はあつたみたいだがな…まさか今日来るとはな」

「だよなあゝあの束さんがなあゝ」

なんだ？その「あの束」つて言うには何かの暗号なのか？

「なんすかそのあの束がつて」

「あれは極端に人見知りでしかも興味を持った人間にしか相手の事を知りたがつたりしないんだ」

「俺と千冬姉は昔束さんとこの道場に行つてそれで幼馴染なんだ、それで正直言つて俺と千冬姉と束さんの妹意外に束さんが興味を持った人がいないから驚いてたんだ」

「興味ねえ……俺のどこに興味を持つ要素があるんだか…」

平均と半分

要するに平凡の極みだ

ISを作るような天才が興味を持つと思えない

「天才ゆえの興味だろう。それに平均と言うがある意味天才じゃないか、例えばISのコアを作るのは束だけだ…ということは平均的に見ればISを作るのは100%と言うことになる、だから束に作り方を教わればお前もコアが作れると私は思う、ゆえに天才と

「いうわけだ」

「それは良い考えだねちーちゃん、ねえレイちゃん私の助手にならない？」

「レイちゃん……？」

「瞬悠かと思っただが博士が言ったのか……」

「興味を持っているのは確定したな」

「何を冷静に分析してるんですか千冬さん?!」

ちなみにこの千冬さんって呼び方は仮にも家で居候として過ごしていくのだから先生と呼ぶのはやめよう的になったのだ
ってそんなことは今は良いんだ!

「じょ…助手?巧…博士に「束さんって呼んで」はかs「束」……
束さんに何を言ったんだ」

「俺は事実を言ったただけだ」

「答えになつとらんわ!!」

「それよりもどう? なつてみない? IS学園は普通に通ってもらつて良いから卒業したら手伝つてよ」

わからん…この人は何を言ってるんだろうか…手伝い? 助手? 俺にできるとは思えない

「俺にできるとは思えないのでお断りさせていただきます」

「そうかな? レイちゃんは一回目ISに触れても起動しなかったのに二回目は起動したんだよね?」

そつだ、俺は巧にいろいろ言われてISを起動させたんだ

「人類の半分は動かせるつて思つてたら起動したんだよね?」

「ええ、その友人に言われ意識したらいつの間にか」

「じゃあそれつて一回目のときにも意識してたのかな?」

詳しくは覚えてないがそんな事考えながら触つてなかっただろうな

「いいえ」

「じゃあ二回目は意識したとたん起動したんだよね?」

「はい、そうですね。誘導尋問みたいにされてたらいつの間にかです
ね」

「ということは君の考え方が変わったら起動したってことになるよ
ね？」

「まあ…そうなりますかね？」

「じゃあ君が考え方を変えれば平均以上になんでもできるんじゃない
のかな？」

「考え方？そんな簡単なことじゃないだろ
第一考え方変えるだけなら」

「人の考え方がそんな簡単に変わるなら俺だって何とかしてますよ
……」

「そうだね、人の考えを…意思を変えることは難しいね、でも君は
ISをたった数分で考えを変えて動かしたよ」

「それは…きつと初めての事でまだ考えがはつきりしてなかったか
ら…」

ISを触ったの何てあれが初めてだし
動かそうなんて考えたのはあの時ぐらいかもしれん

「ならISの事ならまだ平均じゃなくなる可能性があるじゃないか。
それに君は平均的なのを無意識で実行している気がする、それがで
きるのは天才だからこそだと私は思うよ」

平均じゃない……それは長年思い続けてきたことだ
でも真剣に直そうとしたことはない……かもしれない
巧と悠に何度も「直そう」と言われて一度真剣に！真剣に！真剣に！
いろいろとやったが悲しい結果……変わらなかったのだ

天才？この俺が？笑える冗談だ
でも……この人の真剣な顔で言われると嬉しくないわけがない

「もう一度聞くよ、私の助手にならない？」

どうすればいいかわからない……平均的で困ったことはない……
でもISを動かした時点で世間的に見れば俺はもう平均的ではない
のだろう

「物は試しだぞ零時、せつかく天才の博士からの誘いなんだ。俺も
お前は天才だと思う。それにせつかくのチャンスだ、前は失敗した
からってもう努力しないって理由にはならないだろ」

友人からの後押し

こいつは俺に嘘はつかない 悠関係になると平気でつくが……

「やって……見ようかな……俺……頑張ってみるよ、もう一度頑張っ
てみるよ」

「うんうん！それがいいよ！」

がばつと俺を抱きしめてくる束さん
ココは桃源郷ですか？二つのおp

「悠には報告しといてやる」

すかさず束さんから離れる

……俺の人生はここで終わるようだ

「冗談だ」

もっと感じてたかったのに！！

「じゃあ私は今日はこれで帰るよ、また明日ね」

誰かが何か言う前に出て行ってしまった

「まあなんだ安部…大変だと思うがアイツの相手は頼むぞ」

「はあ」

もうなんか生返事しかできなかった

05（後書き）

テストやばいw

3点wwwwww

次回はそのまま

現実逃避のお話の続きですw

朝目が覚めるとそこは見知らぬところだった

「ってわけでもないか」

ココは織斑家、ISを動かしてからお世話になっている家だ
でも二日目だな

「今日はまたはかs…東さんが来るんだっけな」

ピンポーン！

「お？来たのか？」

現在俺はリビングで布団を借りて寝ている
すなわち俺がきつと一番に反応できるはず
だから玄関に向かおうとすると

「ん？なんだ起きていたのか、私が出るから顔でも洗ってこい」

スーツ姿の千冬さんに会い

俺は言われた通りに顔を洗いに行った

そしてリビングに戻ると

「おお零時、お前のノーパソとゲーム類もってきてやったぞ」

来たのは東さんではなく巧だったようだ

渡されたポストンバックの中身を見るとPCとPSPにPS3まであった

「お前昨日もそうだったが学校はどうしたんだ」

「そうだな、私も教師として聞きたいな」

そっぴや千冬さんは先生だっけ

「昨日は休んだ、ちゃんと連絡もした、今日はちゃんといくさ、でも行く前に荷物持って来たんだ、んじゃ渡したから行くな」

「待て貴様……今気づいたらどうやって俺の私物を持って来れたんだ」

「んなのお前の母親に言ったからだよ」

「そっか……やましいことはしていないな」

「そっだな……ベットの下の本の内容を全部悠言ったぐらいだな、意外にマニアックで悠もさすがに驚いていたな」

俺のプライベート返せ！ISを動かす前に戻りたいよ！
くそっ！泣けてきちまうぜ！

「さて、私は仕事に行く。お前もそろそろ急がないのではないのか相沢兄」

「おっと、ではまたな零時」

まったく去り際もイケメンでむかつく……今度悪意を込めてハンサムと呼んでやろうかな

「私も行ってくる」

今度は千冬さんの出勤だ

「今日は帰って来ない、明日の夜には帰ってくる」

「昨日も休んでもらったし、何かすみません」

「お前が気に病むことではない、留守を頼むぞ。」

「わかりました、いつてらっしゃい千冬さん」

ああ、と言って仕事…IS学園へと向かって行ったリビングへ戻って飲み物を飲んでTVを見ていると

「やつほ〜レイちゃん!」
「ブッ!」
「たば…ねさん……だよ」

しまった!驚いて飲み物吹き出しちゃった…束さんに向かって…

「ふああ〜おはようたばね…さ…ん」

やっと起きたか一夏

「ふえ〜ん、いつく〜ん、レイちゃんに穢されたよ〜」

「いや穢されたって…すみませんでした、でも束さんもいきなり入ってきて脅かすのが悪いんですよ」

「とりあえずシャワー行つて来たらどうですか束さん？」

「ううゝ……そうするよ」

洗面所に向かつて行く束さんを見届けリビングに戻り
巧に届けてもらった中身を確認する

「俺の趣味をわかってんなアイツ」

持つて来たゲームは大体アクション
でもアクション&ホラー系はない
例えばバイオとかバイオとかバイオとか……

友達とかに怖くない怖くないって言われるが……怖いもんは怖いんだよ……
だつて怖いのもりだし…

PCの方はBALDR系そろつててナイスだ
AGE作品もあるしなw

テスト前に佐渡島攻略してテンションあげるのつて常識でしょ？
まあそんなのは俺だけかもしれないが……

PS3もちゃんとコントローラー二つあるし一夏と何かやるか

「なあ一夏、PS3あるんだがなんかやらないか？」

「おつ！マジですか？！やりたいです」

「カセットそのバッグに入ってるから好きなの選んで。それとだ一夏、俺たちもう友達だろ？敬語なんてやめてくれよ、それに俺は居

候だし敬語だとなんか居づらくなっちまう」

「そうです…そうだな、じゃあ好きなの選ばせてもらっちな零時」

「おう、その中の大体俺は終わってるし、一人プレイのでも良いぞ、見てるだけでも楽しいしな」

「ん…零時のおすすめてなんだ？」

「そうだなあ、俺はロボ系好きだからなあ……アマコアとかどうだ？」

「4でも良いがやっぱ俺はf aかな
オペコさんの声聞くためにわざわざ死んだりしてたし」

「あの操作難しいってやつ？」

「難しいのは最初だけだよ、それにP S 2のアマコアの方が難しいって、だからそのアマコアf aは難しくないって」

「ならそれにするよ」

そういつてアマコアを始めた一夏

「へ、こんなの考える人がいるんだね」

「東さん、出てきたんですか」

出てきた東さんの髪は濡れていてなんだかい匂いまでしてくる

「ゲームもなかなかなんですよ、試に今度やってみたらどうですか？」

「まあ考えておくよ」

そのあとは勉強だ、もちろんISのだ

正直束さんは人が変わったように厳しく教えてきた

その反面顔はともうれしそうにしているのだからここで頑張らなきゃいけないと思い必死に覚えているのだからここで頑張らな

時刻は過ぎて夕方

「……俺の頭が…熱暴走する…」

休憩と言われリビングのソファーにダイブする

「お疲れ零時」

そう言っただけで終わる一夏

しかし彼の視線はTVに向いている

「まだアマコアやってたのか……人が頑張ってたのに…」

「いやゝはまっつまってさゝ、今ホワイト・グリントのどこ」

「水没してしまえ！はあゝ……ちゃんと覚えられてるのかな俺…理解はできてても束さん相手だと自分が平凡すぎて困る……」

「安心しろ、ここからでも聞こえたが意味が分からなかったからきつと理解できてればできてるって」

そんなもんかなあ…、お！水没した

「うわぁw俺一人とかマジかよ、勝てなくね？」

とか言っているがちゃんとミサイルもかわしているいる一夏

「おおーいレイちゃん始めるよー」

まだ5分しかたつてないのに…

「が、頑張れ零時」

「……おう」

それからまた勉強

次はISの武器に関してだった

量子変換とかウンちゃんらカンちゃんらだった

夕飯の時間になると一夏が作ってくれたカレーを3人で食べた

「うま！お前料理うまいんだな一夏」

「まあ千冬姉えがいない時自分で作るしね。というか千冬姉えが料理できないから覚えたともいえるね」

「それちーちゃんに報告しちゃおっと」

「そんなあー」

とまあこんな感じで食べた後東さんは帰り
一夏はまたゲームを始め
俺は疲れたからとつと寝た

それからの日々は勉強の日々だった

そして一週間後

「東さんが教えてあげられるのはこのくらいかな」

「ありがとうございます」

自分がどのくらい身につけられたかわからんが東さんに教えてもら
えて良かったと思う

「む、東さんが教えたんだから自分に自信を持つように」

って言われても正直無理だろう
東さん相手じゃ自信つかないって

「どれ、私がテストしてやろう」

そう言って学校から帰って来た千冬さんが言う

「うんうん、それがいいね」

そんな感じで始まったテスト

「そうだな。ISのコアネットについて説明してみろ」

「ISのコアはそれぞれ相互情報交換の——自己発達の糧として吸収もしている。これは東さんが情報交換を無制限にして自己発達一環とした……だから今現在も進化し続けているから全容は掘めていない。でしたっけ？」

「あああっている。むしろ優秀な方だ」

やった！あつてた！しかも千冬さん褒められた

「次は——」

といくつか質問された

「ふむ、正解だ。」

「スゲーな零時、俺でも理解できる内容で助かった。お前先生とか向いてるかもしれないな」

そう言つて一夏が褒めてくれる

正直言えば嬉しい

「先生か…お前卒業したらIS学園の先生にならないか？」

先生か……自信ないな……それに

「それって千冬さんが楽しただけじゃないんですか？」

「ああそつだ、だが悪い話じゃない。IS学園なら外的介入を原則として許されていない、つまり国家・企業・団体から実験体にならないか？という誘いが来ないわけだ」

うつ…正直言えば実験体なんて御免だでも…俺は世間に出ようとしても留年する身だ…あまりよくはない……

「今はわかんないです」

「まあ3年間考えることだ。」

「じゃあ次束さんが出していいかな？」

「はい、どうぞ」

束さんからのか…どれだけむずかしいのだろう

「レイちゃんはどんなISが一番強いと思う？」

はい？問題というより質問なような…

「ん、ISを乗っ取れるISとか？あとは…物量かなあ…ビットとかじゃなくて…NPCみたいに個人人で動くISとか？まあでもISは人がいなきゃ動かないんでしたよね？」

「ふん…ありがとつ、束さんはもういいかな」

「そうか、テストは終わりだ。どうだ自信の方は？」

「それは大丈夫です、自信つきました。むしろ平均じゃないことなんて久しぶりにできて感動してますよ」

「レイちゃんはやればできる子で、自分で自分を平均にしちゃってるんだよ。前にも言ったけ、これからは考え方を変えて行けばいいんだよ。例えば”平均的にすべてできる”とか”平均以上にできる”って最初はこんな風にしていけばきっとできるよ」

そういつて束さんは笑いながら言ってくる
その笑顔に一瞬ドキッ！つとしてしまった

「そう…ですね……俺約束します。きっと平均とか半分とかにとらわれないようになるって、束さんの助手として恥をかかないように頑張ってみます」

「頑張ってね」

そう言って今日は帰っていった束さん

翌日の朝5時

朝っぱらからパソゲして遊んでいる俺

「レインさんかっくいい……サポートってやっぱいいよなあ」

俺は戦闘ゲームなんかはサポート役が超大好きだ

いろんなゲームしてきたが、とりあえず俺には接近戦とか前線で戦う系のキャラとかは全然使えなかった

スナイパーとか壁役に回復役はまあまあできる方だった

今やってる”BALDR SKY”のサポートは憧れる

こんなタイプのジョブキャラがあったら一番に選択してるな

このゲームのサポートは簡単に言うとか敵の視覚やレーダをかく乱させて自分を認識させないとかいろいろだ

「ハッキングとかもあったよな……ISにこんな機能あったら良いのに……」

「ふん……レイちゃんが昨日言ってたISはこのゲームが元なんだね」

「そうですね、でもサポートはあくまでサポート。前衛が居てこそ……って！東さん?!いつも間に?!ってか今日は早いですね」

いつの間にか後ろにいる束さん

「レイちゃんはサポートが好きなの？」

いつもなら10時くらいに来るというのに今日はやけにはやい

「え、ええまあ好きですね」

「このゲーム貸して」

ヒョイツと返事をする前のノートパソコンごと取り上げる束さん

「あ、ちょ束さん」

「2、3日したら返しに来るから、それまで勉強はお休みね」

たたたと玄関に向かい扉のあける音と閉まる音が聞こえた

「一体何しに来たんだか……いやしかし！これで束さんがあれをもとにISを作ってくれば！キタコレ！ww」

なんてテンションが上がつてると

パン！

おう？！突然頭に衝撃が来たから振り返ると

「朝からつるさい！近所迷惑だ！」

そこにはおん……い……ゲフンゲフン

スーツを着た千冬さんが立っていた

「すみません、束さんがさっきいたものですから」

「束が？インターホンも鳴らさずに……」

「ま、まあそれこそ近所迷惑になるから鳴らさなかった……とか？」

「それでもれっきとした不法侵入罪だ」

「ですよー、もうお出かけになるんですか？」

スーツ姿ってことはそうだろうが今は5時半前
ちよつと早いような気がする

「仕事が溜まっていてな」

首に手を置いて

疲れている表情をする千冬さん

「……その……頑張ってください」

俺のせいで……とかよりもきつと応援した方がいい気がして頑張つて
と言った

「ああ……そうだ、お前今日は学校に行ってみたらどうだ？そろそ
ろマスコミも大丈夫だろう、帰りに親御さんに会ってきても良いし
そのまま帰って来なくても構わないぞ」

「学校……（やべ、すっかり忘れてた）……帰って来なくてもいいん

ですか？」

「言い方が悪かったな。家に帰っても良いぞという意味だ。もちろんこの家に帰って来ても構わない」

「親には悪いけどたぶんこの織斑家に帰ってきます、ただ……一泊向こうで泊まってきます、束さんも2、3日勉強は無しって言っていました」

「もう教えることはない……と言っていたような気がするが……まあ束には束の考えがあるんだろうな。泊まってくるのは構わない、親御さんとゆっくり過ごすといい」

「了解しました」

そうして千冬さんが仕事に行き巧が持って来た制服に着替え一夏に事情を話す

「ゲーム類とか置いていくから好きに使って良いから」

「わかった、零時が帰ってくる前にアマコアの虐殺ルート終わらせとくよ」

「もちろんハードの……だよな？」

「も、もちろんだ……たぶん」

「あはは、まあ頑張ってくれ、じゃ行ってくる」

「ああ行つてらっしゃい」

男に見送りされるとは……くっ！

ここは高校

藍越高校の俺のクラス

「よつ零時、今日は来たんだな」

何やら自分の名前が呼ばれたような気がするが

ココは無視

「悠に織斑先生と同棲していると伝えておこう」

い、いずればれることだ……ここで「それだけはやめろ!」となつたところで巧に良いように使われそうだからここは

「好きにすれば、俺はやましいことはしていない」

「わかった…残念だ………悠か? 兄だ、今零時は織斑先生の家に同棲していてな……零時が卒業したそうだ……」

携帯で電話をしている相手は悠だろう

いつも気になるのだがいちいち妹に報告をする兄って……まあ何も言わないでおこう

しかし

イッタイナニヲソツギョウシタノダロウカ?

「ちょ! 巧! 言いがかりはよせ!」

巧に掴みかかろうとすると

「うそだ」

そう言つて携帯の画面を見せてくる

「ま、待ち受け画面…だましたな!」

「日頃の行いが悪いんじゃないのか?」

あははは、とクラスメイトから笑いが起きる

「まあこれでみんなも変に意識しないでいられるだろ」

巧はそういった

俺はわからなかったがきつとクラスのみんなが俺に遠慮みたいなものを巧は感じ取っていたのかもしれない……たぶん

そんなこんなでいつも…ISを動かす前の学校生活を過ごした

そして三日後

「やあレイちゃん」

今日は日曜日です

そしていい天気です

たぶん

「今何時だと思ってるんですか束さん……」

まだ外が暗い……時計を見てみると
現時刻……4時!?

「ちょ……はや」

「いや〜ゲーム終わってこの感動のまま来ちゃって束さんテンションあがりまくりだよ」

その言葉を聞き

ガバツ! 布団からつと立ち上がる

「終わったんですね……?」

「うん……終わったよ……」

「ちなみに感想は?」

サムズアップをしながら良い笑顔をしてくる束さん

「ですよね! ちなみに束さんは誰押しですか?」

「ノインツエーン……って言いたいけどあまりいい性格じゃないから
橘 聖良かな」

やっぱり技術者として思うところがあるのだろうか

「ちなみにこのPCに入ってる物は大体見させてもらったから」

おおおう……中身を見られたってことですね orz
女性に見られるのは抵抗が…

「興味深いものばかりだったよ、マブラヴなんかそうだったね。レイちゃんのおかげで世界への考えかたが少し変わったよ」

「そ…そうですか…」

いつもならプレイしたきたものに対して意見を言いやってさらにそのゲームの良さをお互いに言い合うのだが……どうやら中身を見られたことに対してダメージがあってテンションがあがらない…

「そして束さんはゲームをもとにISを作ってみました」

07（後書き）

いろんなゲーム出てますが登場人物としては出てきません

08（前書き）

テスト期間・・・・・・・・・・10単位ほど落としたかな・・・・・・・・

「はい束さん質問です！」

元氣よく手をあげる

ここ重要ね

たぶん

「はいレイちゃん！」

ビシッ！つと指を差された

「それはつまり467コのISのコアが468コになったということでしょうか？」

「ううん、違うよ」

首を振って否定する束さん

「つてことは盗んできた！？」

「つてそれはないか…自分で作れるのに何で盗む必要があるんだかでもそれならどうして？」

「468コじゃなくて469コになったんだよ」

「そうかそうか…一個じゃなくて二つ増えたからか……つて！ISの事を学んだ今の俺にはわかる！このたった一つが国一つを滅ぼすことができるほど恐ろしいものだところ…それが二つも！二つも増えた？！」

ダッシュをして千冬さんの部屋へと突撃する

昨日たまたま帰って来ていたのはこのためかもしれない！

しかし部屋の主はまだ寝ていた

起きていて着替えていたってラッキースケベがないが今は仕方ない！

「起きてください千冬さん！」

ゆさゆさと体を揺らして起こす

「ん……一体何の騒ぎだ……」

「そ、それがですね！」

事情を話し

ガバツと起きてリビングに向かって行く千冬さんについていく

「やあちーっ、痛い痛い！」

挨拶もろくにアイアンクローをおみまいする

「私はほどほどにしろと言ったぞ」

「痛いよちーちゃん！それにレイちゃんが正式に助手になってくれたなら渡そうと思ってたよ」

ぱつと手を離す千冬さん

「イタタ、もう……初めての助手かもしれないんだから少しくらい大目に見てくれてもいいじゃないか」

「お前の少しは当てにならん……それで、どうするんだ零時」

「もちろんお願いします」

即答で返事を返す

「うんうん、じゃあこれあげる、レイちゃんが本当に変わりたいと思うなら使つといいよ。こっちの青の方は君のPCの中身にあったゲームを参考にしてるから特に説明はいらないね、こっちの紫の方は……まあレイちゃんが私に約束したことを守れていたらきつとこの子が教えてくれるよ」

そう言つて

青と紫のリストバンドを渡される

「ああ後名前は決めてないからレイちゃんが決めてね、じゃあ束さんは忙しいからこれで行くね」

「えっ?! 助手の事つてどうなってるんですか?」

「私は今からでもそうしたいんだけど……」

そこで束さんが千冬さんを見る

「もうIS学園行は決まっている。それに高校は通つておけ」

「だって……でもISで通話できるしどこに居てもレイちゃんは私の助手だよ」

にっこりと笑う束さん

やばい、かわいい

「じゃ、ばいばい」

いろいろ話したかったが行ってしまった…ISの事もっと聞きたかったのに

「束に惚れたか？」

突然聞いてくる千冬さん

「違いますね。憧れ……ですかね」

「そうか……そのISだが今は使うのだが身に着けてもいる。そして隠してもおけ」

「無茶なこと言いますね?!」

バン！

突然耳に入ってきた音により
イスに座ったまま飛び上がってしまった

「驚かせた事には謝罪いたします」

ペコリと頭を下げているセシリア・オルコットが目に入る
妙なところで律儀だな

「ですが！先ほど……いえ、今朝から声をかけているのに無視するのはどうなのでしょうか……！」

そつだ……俺は現実逃避していたんだ

「すまない、現実逃避していて気付かなかった」

こっちが悪いのだから俺も頭を下げて謝る

「しかしだオルコット……君がもし逆の立場だったらこの状況でいつも通りに過ごせるか？」

何を言ってるんだこいつ？みたいな顔された

「考えてみる……ISは男しか使えない……そしてオルコットは女で唯一ISを動かせた……そしていつの間にか始まる男に囲まれた状態でいきなり始まる生活……どうだ？これだけでも現実逃避したくないか？」

目を閉じて考えていたセシリア・オルコットが目を開ける

「そうですね……まだ慣れていないうちはつらいかもしれませんが」

こりゃ全然わかってないな

「まあいい、とりあえず君をわざと無視していたわけじゃないんだ。ところで今何時間目だ？」

「これから4時間目が始まるところですが……授業中も現実逃避していらっしたのですか？」

ちょっと驚き——みたいな感じでいわれる

「まあな。それに俺は1年の授業は去年やったしな、ISに関してはそこそこ……というか結構できる自信はあるから最初のは聞いてなくても大丈夫なんだよ」

キンコーンカーンコーン

「また聞けずに終わってしまいましたわ！」

「これ終わったら次は飯なんだろ？その時でも話してやるぞ」

「絶対ですわよ！」

そういつて席に戻って行った

「随分仲がいいみたいだな零時」

隣の席から拗ねた感じで言ってくる一夏

「これから3年もあるのに敵を作るよりはましだろう。それにあい

つ悪い奴ってわけじゃなさそうだしな」

「ん……まあそうかもしれないけど……」

そこで先生が入ってきて授業が始まった

09（前書き）

お久しぶりです

ではどうぞ

「お昼ご飯は鯖味噌定食です」

「鯖味噌定食って言ったらい、あーんだよねレイちゃん」

「つかなんでお前いるんだよ悠」

「レイちゃんの居るところに私はいる！」

「って言いながらもなんだかんだでIS学園に入学したよな」

「うつ……それは……でもレイちゃんがIS学園に来てくれたから結果オーライだよ！」

「まあこれたのは束さんのおかげだけだな」

「レイちゃんを誘惑する女は私が許さない！」

「はいはい、現在進行形でだが一番俺を誘惑してんのは悠だかなん！？早く膝の上からどけい！俺の理性が決壊しそうだ！」

膝に乗っていた悠を隣のイスにどかす

「ええー、もう……ちょっとおさわりするくらいいいのに……」

「ダメダメ、お前どうせここが女の子だらけでちょっと焦ってるだろ？」

「うん……だつてレイちゃんって小さい子とか年下系が好きだから……」

「いや最近は千冬さんとか束さんみてたら年上もくるなと思ったぞ」

「千冬姉は渡さないぞ！っていつか零時……そろそろ紹介してくれよ」

今まで空気となっていた一夏がシスコン能力で会話に参戦してきたちなみに食堂に来たときは4人で来ていた俺、一夏、篠ノ之さん、オルコットで来ていたのだが食堂の入り口で悠に会いそのまま合流したのだった

「おおすまん

こいつは俺の幼馴染で——」

そこからは5人で改めての自己紹介簡単にすればこんな感じで

篠ノ之との場合

「やっぱり篠ノ之は束さんの妹なのか？」

「そう……です……でもあの人と私は関係ない……です」

声はさほど大きくはないがどこか寂しいような悲しいような声で言う

「無理に敬語使わんでいいよ、一夏と同じように喋ってくれて良いから」

そうか…まあ優秀な人が近くにいるとそんな態度になるよな俺も悠たちが優秀でよく比べられたことあったよよろしくな篠ノ之」

そういつて手を差し伸べる

「ああよろしく頼む、それと私のことは箒で構わない」

箒も手を差し伸べて握手をする

オルコットとの場合

「あんな決闘宣言しといて挨拶ってなんか変だなそれに俺と一夏あんなにバカにされてたし」

「あれは少し血が頭に上っていたせいで…いえなんでもありませんわ」

「そうだな今冷静になってちょっとは言い過ぎたと思ってくれればいいさ」

「じゃないと一夏とオルコット嬢の試合が盛り上がらないからな」

「あら？あなたも私と試合をするのですよ、それとも逃げるつもりなのですか？」

挑戦的な顔で言ってくるオルコット

「そんなまさか、このISを使いこなすために踏み台にしてやるつもりだ

オルコット嬢こそ逃げるなよ？」

そういつて手を差し伸べる

「私は逃げも隠れもしませんわ

それと私のことはセシリアで構いませんわ」

手を握り握手をする

「結果がどうあれ仲良くしてくれると助かる」

「あなたとはそれでもいいのですが……」

一夏のことをちらっと見て目があったのかプイッとさせるセシリア

「まあよろしく頼む」

俺はその反応に苦笑いしかできなかった

一夏との場合

「とばしでよくね？」

「だな」

09（後書き）

セシリアの”私は”わたくしはで読んでもらうと助かります

見つけた！悠！あなたどこに行ってたのよ」

自己紹介も終わったところに悠の名前を呼ぶ上級生

リボンの色からして2年生が俺たちが集まっているテーブルのところにやってきた

「たーちゃんだあ」

名前読んでいたからそうだとは思っていたが悠の友人のようだ

「あら？男の子が2人も…噂の男の子ね…悠が好きな方はどちらかな？」

なかなか…いやかなり美人だなおい！

「レイちゃん？」

目がこわいよ悠さん！

その笑顔は微笑みなんだよね？！そうなんだよね？！

「ヒッ！おおおおお怒んなよ！つか心を読むな！」

「読んでないもん！読まなくったって顔がデレデレだからわかるもん！」

そんな顔した覚えはないのだが
そう思い顔を触ってみると頬が上がっているのがわかる

「にやけてるな……すまん」

「何に謝ってるかわからないけど、わかればよろしい」

そんなやり取りを見て悠の友人がクスクスと笑っている

「話に聞いていた通り仲がいいね

じゃあ君が安部零時君かな？

わたしは生徒会長の 更識 楯無 悠とはクラスメイトでルームメイトでもあるの」

「そうか…いつも悠が世話になっているな、これからも悠と仲良くしてやってくれ」

「もちろん言われなくたってそうするわ

なんせ生徒会長の私を唯一まともに相手できる相手なのだからこちらからお願いしたいぐらいよ」

生徒会長の相手ってそんなに大変なのか？

「うんうん！そうだよ、なんせIS学園の生徒会長は”生徒会長、即ち全ての生徒の長たる存在は最強であれ”って言葉があるぐらいなんだから」

さすがは相沢は家系……最強が相手でもやっていけんのかよ
少しうらやましいなその才能……俺も少しは何かいいところがあればいいんだがな…

「レイちゃん……」

「つと…今のは忘れろ……それにお前たちが優秀なのは俺もうれしいんだから気にするな嫉妬はするがな」

精一杯の笑顔でそう答えると

「うん！」

——ドキッ！

正直今の笑顔は反則だ…笑顔なんて何回も見てきたがこの1年会っていないかったせいかもしれないこの笑顔にくらっときた

この笑顔ならずつと見ていたいぐらいだ…むしろオレだけの——

「あの…えつと…レイちゃん…恥ずかしいな…」

「………当分覗くのは禁止だ」

「うん…そうする…私が持たなそう…」

俺が考えたことにこんなにも反応するのは…まあ今でなくていいかきっと黒いウサギが来たときにでも話すことにしよう

「つと、もうそろそろ授業よ悠

挨拶はまた今度ゆっくりね

行くわよ悠、あなたしか私の相手ができないのだからしっかりして頂戴」

「うん、じゃあまた放課後にねみんな」

「また会いましょうね零時君と一夏君」

手を振ってそのまま食堂から去っていく悠と更識

「ああ、なんかすまんうるさくて、食事中だったし俺と悠がうるさかったおかげでみんなあんまり喋れなかったし、歳が違うからって遠慮しないでくれよな、じゃなきゃ俺3年間やってげそうにないし」

「俺は家で一緒に暮らしたから遠慮なんてしてないぞ、むしろ兄貴ができたみたいで嬉しいし
いやでも面白い人だな悠さんって、巧の妹なんだっけ？」

一夏の家で俺たちは遊びまくったせい까みんな下の名前で呼び合うほどに仲になっていた

ちなみに一夏の親友の五反田 弾とも友達になり同じく名前呼び合うほどに仲良くなった
ただ俺だけはなぜか「零兄^{れいにい}」って呼ばれている

「そうだな、あの2人は双子の兄妹だな」

「確か幼馴染でもあるんだっけ？」

「そうだな、いつ初めて会ったのか忘れるくらい前にあったな
今は黒髪だが実はあの2人初めて会ったときは銀髪だったんだぜ」

3人の驚く顔をちょうど見たとき

キンコーンカーンコーン

「おっと、悠達が授業に向かった時点で俺たちも戻ればよかったな俺たちも戻ろう」

放課後

「悪いな一夏付き合わせて」

今教室にいるのは俺と一夏だけ

まあ廊下には俺らを見ようときた人がいるのだが…え？人数？聞かないでくれ

「気にすんなよ、それにすぐに話が終わるなら一緒に帰れるだろ？」

俺たちはまだ寮ではなく家から通学

実家もそんなに離れているわけではないしせつかくの男2人だし一緒に帰ろうということだろう

「ISのことも零時に教えてもらっただけあつて授業もしんどくないしよかったぜ」

「ISは復習がてら俺が教えてやるからいいとして、ISのこと以外は自分で何とかしろよな」

「マジかよ」

そんな雑談をしながら放課後に来るといつてまだ来ていない悠のことを待っていると

「よかった、2人ともまだ残ってくれてたんですね」

教室に残っている2人とは俺たちのこと
そして俺たちのことを呼んだのは

「あれ？山田先生？どうしたんですか？」

「やまだまや、逆から読んでもやまだまや先生ではないですか」

と俺が冗談かましてると

Bannon!

「馬鹿者、目上の者には敬意を払え」

出席簿アタックをしてきたのはもちろん千冬さんこと千冬先生

「ちょっとしたコミュニケーションなのに……」ボソ

Bannon!

「何かあったか？」

「いえなにも

それで何の用事で俺たちに？」

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そういつて山田先生が2つのカギと部屋番号が書かれた紙を寄越す

「1026室ですか、でも寮使えるなんて聞いてないような」

「自分たちの状況を考えてみる一夏、また千冬さんに助けてもらいたいのかお前は」

難しい顔をしながら考えてから

「そうか…男でIS動かせるんだもんな
でも荷物とか何にもないような…」

「私が手配しておいた
着替えと携帯電話の充電器さえあれば問題ないだろう」

うわ、潤いのうの字もないぜ

「俺のはどうなったんですか？」

「お前のは相沢兄に頼んでおいた」

巧って千冬さんの召使いみたいだな……後でお礼言っておこう

「夕食は6時から7時です、大浴場がありますが織斑君と阿部君各部屋のシャワーを使ってももらいますね」

「えっ！！なんで大浴場使えないんですか！？」

「お前堂々と女子の裸みたいのか？」

ガラガラ

「あれ？山田先生と千冬先生もいる。ああ寮のこと話してるんだね
ごめんねレイちゃん実は、お兄から連絡あつてレイちゃんの荷物持
つてきたから校門まで取りに来てくれって言われて取りに行つて
遅くなつたの」

危なかった……きつとさっきの「えっ！！なんで大浴場使
えないんですか！？」の一夏の言葉に「そうだそうだ！なんでだ」
みたいに答えてたら

Bannon!

「ちょ！なんで俺だけ叩くんですか千冬先生！」

「お前はわざとやっているからだ、それと今の発言は相沢妹に伝え
ておく」

「許してください、ごめんなさい、もう2度と言いません」

土下座までして謝る俺

悲しいな俺

「もう聞いちゃったから意味はないけどね」

教室の扉の前で仁王立ちしている悠

「!？よ、よう悠、お、遅かったな」

「お兄から連絡あつてレイちゃんの荷物持ってきたから校門まで取りに来てくれって言われて遅くなったの」

「そ、そうかありがとうな」

「それよりレイちゃん……レイちゃんは大浴場に入りたいのかな？それとも……女の子の裸がみたいのかな？」

「つてきつとなっていたに違いない」

「レイちゃん？私そこまでレイちゃんの行動を縛らないよ、どうしても見たいなら私ならいつでも見せてあげるよ」

体をクネクネさせながら言う
「はたから見るとかなりの変人だな」

話がいきなり変わっているせいか一夏と山田先生は頭にはてなマークを浮かべている

「山田君、会議の時間だ」

「もうそんな時間ですか?!先生たちはもう行きますねちゃんと寮に帰るんですよ、道草くっちゃだめですよ」

そういつて千冬先生と山田先生は教室から去って行った

「道草もなにも校舎から50mぐらいなのにどう道草くえばいいのやら」

苦笑いをしながらこちらに近づいてくる

「はいレイちゃん手だして」

そう言われて言われた通りに手を出すといきなり俺の前に黒いバックが現れる

「うを?!」

「それ荷物ね」

「な、なんだ今の?!俺の目がおかしくなったのか零時?!いきなり荷物が出てきたぞ?!」

「安心しろ一夏俺もだ」

慌ててるのが近くにいると冷静でいられるな

「ふふ、驚いた？私専用機持ちだから量子変換して拡張領域に入れておいたの」

12 (前書き)

話が進まない…

説明不足とか話飛んだりしてても無理やりシャルとラウラが出る
ところくらいまでは少し早めにいこうかな・・・

夜

1026室

「災難だったな一夏」

俺のベットは入って手前の方

そして奥にあるベットには灰になっている一夏がいる

「あがあゝ」

そしてこの灰になったのはお隣の1025室の住人にやられて帰ってきた

「災難っていうより自業自得じゃない？あとで箒ちゃんに謝つときなよ」

「まあ引つ越しじゃないんだから隣に挨拶に行く必要もなかったし返事がなかったからって中に入つた一夏も悪いな

そして悠よ……荷物の整理を手伝ってくれたのは嬉しいがいつまでここにいる気なんだ？」

荷物を取ってきてくれただけではなく整理まで手伝ってくれたのはうれしい

俺は家事全般は母さんと悠に頼ってばかりだったから全然できないので助かるのだが……お前は俺の母親か！？と言いたく

はなる

ちなみに巧からの秘蔵品は鞆を開けて真っ先に見つけられ一発処分であった

「レイちゃんって体小さい子の多いよね……ロリ？」と言われたが断じて違う

「てつきり専用機について聞きたいのかなって思ったからいたのに……」

とりあえず噂のことを聞いて今後どうするか聞いたら今日は帰るよ」

今日もつてとこを強調して言わんでもいいっての

「噂？つてなんだ？」

「なんかイギリス代表候補生と決闘するらしいってホントなの？」

もう2年まで噂が……と言つか唯一2人の男のことなのだから当たり前と言えば当たり前なのか？

「まあ事実だ、昼にいた金髪だ。それで今後のことつてなんだ？」

「それ本気で言ってるの？」

ほら！一夏も聞きなさい！」

まだだらり〜んとしているがベットから起き上がる

「ISの起動時間なんて200時間越えしているであろう相手なんだよ？」

よほど勝ちにこだわってないか油断してるかじゃないと絶対勝てない相手なんだよ？

それなのにレイちゃんは一夏は10時間も起動してない素人もいいとこの人間、私ならそんな状態で私に挑んでくるならESに乗りたくないくらい容赦なしで相手するね」

相手が悠じゃなくてよかったと心底思った

「でも対戦する前に努力してきたとわかるくらいのことをしてきたなら私なら相手に失礼の内容に本気で相手をするね」

さっきの容赦なしと本気がどう違うのかが理解できない

「前者は相手にするのさえめんどくさいから早く終わるように容赦なしで相手をする

後者は勝っても負けても相手と試合できたことを誇りに持てるような試合をできるように本気を出すってこと」

「わかったような……まあ話を続けてくれ」

「押し付けがましいけど2人には何もしないで試合をしてほしくないってこと……」

真剣だ顔で訴えてくる

「そんなの最初からそのつもりだ、なあ一夏」

「おう、あんなだけバカにされたんだ
負けてたまるかよ」

やる気満々の一夏

「と、いうことだ

それで相沢先輩……そんなことを言い出したんだ
何か提案があるんだろ？」

「やめてよ先輩だなんて

あるけど……とりあえず私に任せてくれる？」

「俺は構わない、一夏はどうする？」

「俺も構わないよ」

「じゃあ明日の放課後また教室で待っててよ」

12 (後書き)

進まね
~~~~~  
W  
W  
W  
W

翌日の放課後

今ここに集合しているのは4人

俺、一夏、篤、悠

「へー一夏には専用機がくるんだ」

「実験体って言われていい気分はしないけどね

そついや悠は専用機あるんだよね？っていうことはどこかの代表候補生とか企業に所属してるのか？」

「そうだよ、お姉さんは企業様所属ですよ、倉持技研ってところなんだけど知ってる？」

「ああ、なんか俺もその倉持技研ってところだと言ってたような」

「えっ？！それホント？！」

そついつて俺と篤にも目線で本当に？とうつたえてくる

「ああホントだぞ」

「私も聞いた」

それを聞いて腕を組み何やら考えている様子

「何か問題があるのか？」

「ん？実はたーちゃんの妹が倉持で専用機作ってもらっているはずなんだけど……確かまだ完成してなかったような……」

「なるほど…世界的に見て男が乗るISのデータの方が重要だからな…だから一夏のISの方が先にできるかもな。むしろ更識の妹には悪いが一夏がいる限り完成しない可能性もあるな」

「マジか……罪悪感出てきたんだが…」

ガクシとうなだれ始める一夏

まあ更識妹の心境がわからんでもない  
俺も一夏がISに乗ることがなかったならば検査なんかなかったはずだからな

「試合が終わった後にでも会いに行ってみれば？」

「そうするよ」

「とりあえず今は気にしないこと、だって練習機よりも専用機の方が絶対性能がいいはずだもの  
さて……今日は2人の現在の実力を測ります  
そこで箒ちゃん、一夏のことを頼めるかな？」

「わ、私か？しかし何をすればいいのだ？」

「んゝ箒ちゃん剣道できるんだ、じゃあその剣道で一夏を鍛えてあげなよ」

「それならば私でもできる」

腕を組みながら

私できちやいます！みたいな顔で言っ  
どや顔だなw

「剣道ってISに関係あるのか？」

対して一夏は？マーク

この2人面白いな

見てて飽きない

「だって一夏専用機ないんだもん  
せつかく専用機来るのに訓練機で変な癖つけたくないでしょ？」

「まあ確かに…」

「じゃあ箒ちゃん、一夏連れて行っちゃっていいよ」

「わかった、行くぞ一夏！」

「え？お、おい箒？！零時はどうするんだよ？！」

「レイちゃんは整備課の方へ行くんだ  
だから今日は別行動だよ」

「早くしろ一夏、おいていくぞ」

「待てよ箒いゝ」

先に行ってしまった箒を慌てて追いかける一夏

やる気満々でどんどん先に行ってしまう筈

「やっぱあの2人おもしろいなwというかおもに一夏が」

「そうだね、お兄とは違ったタイプだからね  
じゃあ整備課に行こうか」

「何するんだ……っとこれは行けばわかるか」

「ではレッツ・ゴー」

## 整備室

「自分のISのことまったくわかってないのはどうかと思うよ  
じゃあIS出してくれるかな、動かすのはどんなのか調べてからだ  
からね」

素直にISを悠に差し出す

「ホントに2つなんだ……」

「ん？巧から聞いてたのか？」

前にも思ったがいちいち妹に報告する兄って……いや考えるのはや  
めておこう

「まあね……まあいいや

ちやつちやと調べちやおうか、まずは蒼いこっちの方からね」

何か思うところがあったのか一瞬難しい顔をした

蒼い方をコードにつなぐといくつかのディスプレイが出てくる

「お前この機械の使い方わかるのか？」

蒼い方につなげたコードの先にある大きな機械のことを指さして言う

「私専用機持ちだよ？できるに決まってるじゃん……ほいっとな」

いくつもあつたディスプレイが1つになり  
その1つのディスプレイには

NONAME 搭載武器なし シールドエネルギー450

スペックは的には二世代  
ぱつと見た感じでこんな感じ

ふむふむ

「っておい！武器なしって何ぞそれ？！スペックなんて三世代でもないし？！てつきり三世代のくれたかと思つたよ俺？！なんでだよ束さん！」

頭抱えてノー！！ってなつてもいいんだよね？！

ノー！！！！！！

「ちょっと落ち着いてよレイちゃん！」

——— 落ち着くまで少々お待ちください ———

「落ち着いた？」

「落ち着きました」

「よろしい。別にこれでも問題ないんだよレイちゃん、せっかくの自分の相棒なんだからそういうこと言っちゃかわいそくだよ。名前さえあげてないのはどうかと思うけどね」

ジト目で見てくる

そんな目で見えるなつての

「ちゃんとこっちの蒼いのの名前は考えてあるつての」

「じゃあ今設定しちゃおうか

ちゃんと紫の方も考えてあげなよ、もらってから1か月半もたつてるんだからね」

「わかつてるよ……」

とりあえず蒼い方の名前は”アイギスガード”」

「レイちゃんホントにレインさん好きだね……」

ジト目が引いてる目にレベルアップした

そんな目で見ないで！新しい世界が見えちゃう！

「ほいっとな」

あつという間に設定が終わりまたいくつものディスプレイが出てくる

「なあさつき言ってたコレで問題ないってどういうことなんだ？」

「この子異常に拡張領域があるみたいだから武器なくても量子変換すれば後付武装が使えるから現時点で武装がなくても問題ないってこと」

「要はプレステのメモリーカードの容量はいっぱい余ってるけど今は何にも入ってないってことか？」

「そうなんだけど……そうなんけどもつとなんか例えあったでしょ」「ない」即答……レイちゃんをこんな風にしたお兄とは少し躰が必要だね」

しーらないつと

「やつぱりここ先に来ておいてよかったね  
とりあえず何入れてみる？って言っても訓練機に使うのしか今はないんだけどね」

そういつて一番手前に武器一覧のディスプレイを見せてくる

「とりあえず剣、銃、盾が無難じゃないか？」

「了解つと」

カタカタとキーボードを叩く  
結構速いな

なんてことを思っていると

ビー！

ERROR!

コアの存在を確認できません

「「はい？」」

2人して首をかしげてしまった

「今何したんだ？」

「何って、普通に武器を入れようとしただけだよ」

もう一度チャレンジしようとしているのかさつき見た一覧からまた武器を入れようとしている

ビー！

ERROR!

コアの存在を確認できません

「・・・・・・・・・・」

ブチッ！

あっ、今なんか切れた

「大丈夫「ちょっと黙ってて！！！」…ハイ」

——しばらくお待ちください——

ガタガタガタガタガタガタガタガタ

「何よこのじゃじゃ馬！こんなわけわかんないのにレイちゃん乗せないんだからね！」

ガタガタガタガタガタガタガタガタ

キーボード壊れちゃう！

——お待ち——

ようやくガタガタとなり続けていた音が止まった  
何分たったのだろうか……20分か……長く長く感じたぜ

「なあ、どうなったんだよ悠」

「私は今ものすごく驚いています」

「いやそつは見えないからな」

至っていつもと変わらない顔だ

「私だけではどうにもできそうもないから千冬先生を呼んできます」

ガタツ！と座っていたイスから立ち上がると

「レイちゃんは待ってていいからね」

シュタツ！と手をあげて扉に向かって

全力疾走

「ちょっとくらい俺に説明していったっていいじゃないか?!」

15 (前書き)

チート回

## 整備室

悠が千冬先生を読んでからはあくどくだ推測しながら話していたが

「結局は東さんに聞いた方がよくね？」

（ちなみに俺は、はぶかれてた  
俺のISなのに！）

とまあ自分ではめっちゃいい発言したと思っていたのに頭をはたかれた

悠まで叩いてきた           ぐれてやる

そんなこんなで今日は誰も使わないというアリーナへと移動してきた

「もう、博士に連絡できるなら最初からそうした方が早いに決まってるじゃん」

「悪かったって」

「あまり時間がない、ISを展開しろ」

「うっす」

目を閉じて頭の中でアイギスガードのことを考える

「来い！アイギスガード！」

ふむ、何とか展開できたみたいだな  
つか変身！！みたいでかつこよw  
首から下はもろ本物のアイギスガードだなw

「もうちょっと早く展開できるようになるといいんだけどな」

「熟練した者なら1秒で展開できるぞ」

俺の余韻がパーだな  
つか今俺5〜6秒かかってたな……道のりは長いみたい  
だな……

「あれ？　そういえばなんでアリーナ来てIS展開しなきゃいけな  
かったんだ？」

「「はあ」」

美人2人からの溜息！　目覚めました！　新しい世界ですね！

「そのISをもらった際束が「ISで通話できるしどこに居ても」  
みたいなことを言っていたのを覚えてないのか？」

「そんなことを言っていたようなないよな……とりあえず通話すれ  
ばいいんですね？」

ISに入っていた束というアイコンを選択して通信をつなげる

『やっと起動してくれたんだね。　きっと私に聞きたいことがあると  
思ってたから待ってたんだよ』

突然ハイテンションの束さんの声が聞こえる

「どうも束さん、お久しぶりですね。それでこのISについて教え

てくれるんですか？」

『うんうん、もちろんだよ』

「おい安部、通信をオープンにして私たちにも聞こえるようにしろ」

オープンですねオープン……コレか？

これでどうだ？

オープンにするボタンかと思ったが俺の目の前にディスプレイが出てきてその画像に束さんが映る

『およ？ちーちゃんだ！ヤッホー』

テレビ電話みたいなのか

ISの知識麵は教えてもらったが使い方は教わらなかったからなあ

『そっちの子が相沢巧の妹だね』

「初めまして篠ノ之博士。兄から話は聞いてます」

『そつ』

なぜやら千冬さんがびっくりしている

まあそつだよな束さんって身内以外に興味ないってことなのに悠と初対面なのに話してんだもんな

『アイギスガードかぁ、レイちゃんならそう名付けてくれると思うたよ』

アイギスともう一つのISについて知りたかったんだよね?』

「そっだ、このISはなんだ  
武装がないのではなく使えないのではないか」

千冬先生が厳しめの口調と態度で言った  
つか武装使えないの?! 拡張領域はあるんだから使えるんじゃないの?!

『アイギスはね』

ISを取り込んでISを召喚するんだよ』

「な!なんだって〜!」

「「うるさい黙って(ろ)」」

ハイ すみません

「続ける」

『あんまりレイちゃんをいじめないでね』

「束!」

『わかったよ〜』

千冬さんに怒られてシュンとなった束さん激萌え!

——ギロリ

悠に睨まれた

零時は動けなくなった

『あとね、アイギスはスペックこそ二世代じゃないけど能力的に必要なからそのスペックであって世代的には四世代なんだよ』

今各国で三世代を作ってるのにもう四世代のISを作ってるのか……俺この人の助手なんかできるのか？

「必要がない……とはどういうことだ」

『アイギスは取り込んで召喚できても動かすことはできないんだよ……できないんじゃないって手におえないから……かなやつぱり人1人に1つのISが精一杯なんだよ、たとえちーちゃんでもね

でもISに動かすシステムを入れれば本当は動かすことはできたんだけど、動かすことじゃなくて唯一仕様の特殊才能を入れるためにそうしなかったの』

「ワンオフ・アビリティ……でもそれじゃあ取り込んだ意味がないんじゃないんですか？」

『別に動かす役割はアイギスじゃなくたっていいんだよアイギスはISを武器として認識しているから所有者が使用許可をすれば違う人が使える用にすれば違うISにだって使えるんだよ』

「そうか……それで2つのISをくれたんだ……」

アイギスにはISを取り込む力があつて紫はその取り込んだISを動かすことができるってことですね？」

『ピンポンピンポン！正解だよレイちゃん』

紫の子はAIがあつて人間と違っていくつものISを動かせるように作つてあるの、だから搭乗者がいないISも動かせるようにできてるってわけなのですよ』

要するに

アイギスで召喚したのはアイギスで動かせないが紫の子にあるAIならば動かせるってわけか

「しかしこの力は公にしているものではないな」

え？だってこの2つのISがあれば一騎当千みたいなことだってできるのに？

「どうやって取り込むかわからないけど、これってある意味ISが盗み放題ってことだよ

もし戦闘中に取り込めたら最強……最凶だね」

『取り込み方はコアそのものに触れれば取り込めるよ』

で、唯一仕様の特殊才能は電子戦特化能力だよ

アイギスはこつちの特化能力の方がメインかな、だからスペックは二世代になっただけだね……能力は名前の通りでジャミングとかハッキングとかできちゃうよ、もちろんISでもじゃなくてもできるよ』

「化物ISだな……」

確かに千冬さんの言うとおりこれは…ちょっと危険だ  
つかスペックは必要ないって言うかそのぐらいにしかできなかった  
んじゃないのかな……………

『ちなみに紫の子にもISの機体と唯一仕様の特殊才能があるからね。』

それとそれと初回起動はいつになるか束さんにもわからないから  
じゃあ束さん忙しいからそろそろ切るね、ちゃんと紫の子にも名前  
つけてあげてね〜バイバイ〜イ』

そこで束さんとの通信は切れた

「零時…………そのISの取り込む能力はよほどのことがない限り使う  
な…………言ってる意味はわかるな？」

まるで家にいるときの一夏に対する態度で忠告してくる千冬さん

「わかってます、それとアイギスの唯一仕様の特殊才能も必要なく  
き以外使わないようにします」

「そうしてくれ」

## 15 (後書き)

スーパーウルトラチートきたwww  
www  
www  
www  
www

翌日

昨日あのあとはすぐに解散

部屋に帰るとボロボロになっていた一夏がベットにいた

俺も精神的に疲れていたせいか夕飯も喰わずに寝てしまった

放課後     アリーナ

「結局一夏は箒ちゃんに一週間扱かれそうだね」

「更識妹のとこに行つてからだそうだがな

それに一夏はまだ専用機来てないしそうなるんじゃないか？

それよりもだ悠・・・・・・・・・・なんでここに更識姉までいるんだ？」

俺の目線の先には水色の髪をしたIS学園の最強の称号を持っている更識     楯無がいた

「そんなにジツと見られちゃるとお姉さん恥ずかしいな

それと楯無って呼んでくれるとうれしいな^^」

手に持っていた扇子を広げるとそこには     羞恥     と書いてあった

顔は全然恥ずかしがってないんだがな

そっぴや楯無って女の子っぽくないよな

「了解、楯無って呼ばせてもらう  
それで悠、どうしてだ？」

別にいて困るわけじゃないが昨日の話からして最初の方はなれるま  
で話しやすい悠と2人がよかったんだがな

「2人きりがいいだなんて… いったい何する気だったんだか…  
… じゃなくて昨日実は部屋に帰った後レイちゃんと特訓する  
んだって話したらたーちゃんも一緒に混ざりたいって言ったから  
いいよって言ったの」

「学園最強に教えてもらえるなら俺は構わないさ」

「1位と2位に教えてもらえるんだから贅沢言えないでしょ」

1位は更識 2位は？

「私だよレイちゃん」

笑顔で言ってくる幼馴染

「俺の幼馴染はついに世界を相手にできそうなくらい強くなってい  
ました」

「そんなに強くないってば  
もう、時間ないから始めるよ」

そういつて悠の体が光ったと思ったら1秒も経たずにISを展開していた

「ちきしょー！」

自分と更識がもISを展開した後

「悠のISって打鉄なのか？なんか微妙に違うが……」

見た感じそんな感じなのだが違うような…

「もとは打鉄なんだけどこの子は打鉄・改っていうの、企業のだから好きに名前変更できないのがくやしいな」

「私は好きだよ打鉄・改」

「私だって嫌いなわけじゃないもん、ただこの子は1年前とはだいぶ形も仕様も変わったから今にふさわしい名前があるだろうになって思っただけだよ」

さすがはルームメイト同士なだけあって仲がよさそうだし

「1年でそんなにISって変わるもんなのか？」

「悠は特別だね、最初は打鉄のスペックをあげた改修機だったのだけど悠の能力についていけなくて一回壊れてるのよ、その時に悠専用さらに改造して悠好みになったってわけ」

「今では武器だけを変えるんじゃないくて装甲も量子変換して後付武装として臨機応変に変えられるようにしたってわけなんだ  
試しにに見ててよ」

悠の手元が光り刀のようなものが出てくる  
それを両手で持ちかまえている

「よく見てた方がいいわよ」

楯無にそう言われもつと注意深く見る

動きだした！

最初は剣道の胴のような動きをしたかと思うと手にあるのは刀ではなくバズーカ、そして悠のISが装甲でもっと大きくなっていたバズーカを撃つたと思ったら今度はほとんどの装甲がなくなり代わりにスラスターのようなものが出てきたかと思うと撃つたバズーカの弾を追いかけて正面に立った  
今度はまた重装甲になり盾を構える、盾に弾が当たり悠の周りに煙が立ち込める

「お、おいあれ大丈夫なのか?!」

心配になって楯無に聞いてみる

「本人に聞いてみればいいんじゃないかな？」

本人って……あの煙の中だろ？

………確かめに行こう

「大丈夫だよレイちゃん」

「うわっ!」

突然後ろから声が聞こえるから後ろを向くとそこには煙の中にいるはずであるう悠がいた

「実はあれ盾で受けたんじゃないかってレイちゃんの死角になってる盾の影から当たる寸前でサブマシンガンで撃ち落として煙ができたときにこれまた死角になってるところから瞬間加速っていう技で煙から出てレイちゃんの後ろに回ってきたってわけだよ」

驚いた……今の一瞬でいろんなことが起きすぎていて驚いたとしか今は思えない……

きっとこれがISに慣れてきたころに悠の今の行動がすごいことがわかるんだろうな……

「ふふ、だから私よく見てた方がいいわよって言ったのに」

心底楽しそうな顔で言ってくる楯無

2位の悠より強いという楯無……この2人に教われるっただけでも実はすごいのでは？

1026室こと自室

そこにはボロボロになった一夏と俺がいた

一夏は筭によってボロボロだが俺は……

「ほらほら避けて避けて」

空中からとありとあらゆる弾を撃ってくる悠

「ダメダメ、避けるときは三次元躍動旋回しながら撃ってきてる人を正面に捉えながらだよ」

地べたを這うように避けているではなく逃げている  
その俺にランスを持った楯無が追い打ちをしてくる

「これは避ける訓練で逃げる訓練じゃないんだよ」

「できるかっての!」

ちなみにコレは決闘までずっと行われた

そして決闘当日

「どんまい一夏、まだIS来てないとかウケるな」

「おかげで剣道づくしだったよ……そしてISのことはぶつつけ本番だよ」

不満げに言う一夏

「仕方ないだろう、知識については零時から教わっていたのだから」  
ちよつとすねていふような申し訳なさそうに言ふ篤

「ISがあつてもそこそこしか上達しなかった子もいるけどね」

明らかに俺を見ていう楯無  
なぜお前までいる

まあ美人だから許す

「レイちゃんだって頑張ってきたんだから良いんだよ」

最後にやさしく慰めてくれる悠  
しかしだな……

「結局武器なしでどう戦えと？」

俺の質問に悠と楯無が目をそらす

そんな時

「織斑くん、織斑くん、織斑くん！」

と胸を大きくゆら

ギョッ！

「鼻の下伸びてるよ」

と腕を絡ましてくる悠

こちらも中の弾力で……

「来ました！織斑くんの専用IS」

「織斑はすぐにフォーマットとフィッティングをしろ

阿部は出撃準備だ」

千冬さんの命令に従い準備をする

ちなみに俺は特訓の時にフォーマットとフィッティングは終わらせてある

準備が終わりビット・ゲートに立ち、ビットに残るメンバーを見て

「負けてくる！」

「……えっ！」「」「」

後ろから何か聞こえて無視して発進する

まあ結論は

負けたよ

武器なしで戦えと？

例の電子戦しようと思ったたら動きながらじゃうまくいかず止まると  
相手が待ってくれるはずもなく撃墜

傍から見たら自分から止まって弾をくらったように見えただろう

そして一夏はバリアー無効化攻撃というもろ刃の剣で勝てる寸前で  
自滅して負けた

俺ら男2人そろって負けて終わったのであった

## 17 (後書き)

今回端折りに端折った……

クラス代表は結局セシリアが辞退し  
セシリアを追い詰めた方は一夏だったためクラス代表は一夏に決ま  
った

授業中

「これよりISの基本飛行操縦を実践してもらおう。織斑、安部、オ  
ルコットは試しに飛んでみせろ」

いち早く飛んで行ったのはセシリア  
次に俺、一夏の順でセシリアを追いかけるように飛び立つ

「遅いぞ織斑！スペック上は白式が一番上だぞ！」

俺よりも遅い一夏が千冬さんに怒られている

「ぶ、一夏怒られてやんの」

「うるせい！零時だってセシリアに追いつけないじゃないか！」

「俺のはこれが限界なんだよ！なめんな第二世代スペック！」

無駄にあーだこーだしながらセシリアのもとに追いつく

「ふふっ、お2人とも仲がよろしいですね」

そうそう。あの決闘以降セシリアが一夏に惚れだした

一夏は恋愛原子核の力絶対持つてるな、うん

「まあここに来てからの仲じゃないからな」

「2人だけの男だし、女子にはわからない話もあるのだよオルコツト嬢

特に一夏の性癖とかな」

「何言ってるんだよ！そんな話しまだしたことないだろ！」

「“まだ”な！弾とは良くしたがお前とはまだだもんな、今日部屋戻ったらするか」

なんて話してると

『一夏っ！！いつまでそんなところにいる！』

山田先生から奪ったインカムで箒が叫んでいる

山田先生かわいそうだな……

「次は急降下と完全停止をやってみる、目標は地表10センチだ」

今度は急降下か……………

「では、お2人ともお先に失礼しますね」

セシリアが先行して手本代わりに急降下と目標を成功させた

「んじゃ俺先に行くぞ、ではお先に失礼お姉ちゃん大好きな一夏君」  
からかってから急降下を始めると

「なんだと！零時は悠の好意を受け止めないヘタレじゃないか！」

「あんだと！」

聞き捨てならないと、振り返ると

「ちょ！お前なんで「うわ！止まるなよ零時！ぐへっ！」ぐはっ！  
！」

振り返ったところに急降下した一夏にぶつかり、アイギスとでっぴ  
りで引つかかって落ちていく、もとい墜落していく  
しかも何とかしようと2人でISで抗うものだから離れるどころか  
加速して墜落していく

「「うわ」仕方ない！アイギス解除！」

展開を解除してアイギスが消えたことにより引つかかっていたのが  
外れ、一夏を足蹴りして離れる

「アイギス展開！」

一夏はそのまま地面に激突したみたいだ、ISと人間じゃ速度が違  
うせいか俺はまだ結構上空にいるのだが

ふむ……俺まだ落下してるぞ

「ハレ?!……アイギス展開!ちょ!!!!……ノー!!!!  
!アイギスが展開しない?!?!?!うわ~~~~~!」

異常なのがわかったのか下にいるクラスメイトが慌てるのがわかる

157

—— 大丈夫、やっとあなたの力になれる。私の名  
前を呼んで零時。

電波受信いたしました!!!!!!……!!フラグ?!  
でもなぜだろう……きっと今が電波ではないと俺にはわかる、な  
んせーか月半ずっと身に着けていたのだから。まあ最近になって名  
前を付けてしまったのだが……

「来い！武御雷！」  
たけみかつち

ん？武御雷にもISはあるって東さん言ってたよな？じゃあなぜ展開しないんだ！？

『大丈夫、私はアイギスを展開しても使えるようにできているから人が乗れないようになってるの』

スカイダイビングのように落ちていたら後ろからやさしくつかまれ徐々に落ちていくスピードが落ちていく  
ゆっくりと地面へと降下していく

「そのISもAIで動かしてるってことが……自分に展開されないから焦ったぞ」

『すみません、しかしスリルがあって楽しくはなかったですか？』

「怖かったわ！たく……」

そしてゆっくりと地面へと降りていき、みんなが近づいてくる  
特に先生2人が早足で近寄ってくる

バチーン！

千冬さんの射程内に入ったのか予告なしにバチーン！と引っ叩かれた

「この馬鹿者が！」

バチーン！

「イッて！」

もう一度引っ叩かれた

ご丁寧と同じところにだ

「ひよつこが空中でISを解除するんじゃない！！あのまま2人で落ちてきた方が安全だったんだぞ！ISのは絶対防衛があるだぞ！お前の行動の方が危なかったんだ！わかってるのか！」

千冬さんの剣幕に近寄ってこようとしていたクラスメイトも近くには来ようとせず、山田先生まで離れている

「わかりました……」

あときは高度があつたから助かった……もし低かったのにやっていたら俺は死んでたんだな

「つぎ同じようなことをしたらISは没収する、いいな！」

「はい、わかりました」

「よし！では本日はこれで終わる！」

織斑は穴を埋めるのを忘れるな！安部、お前はそのISについて話してから解散とする。以上、ただちに解散しろ！」

パン！と手を叩いて合図すると一斉に動き出すみんな、あののほほんさんでさえ走って移動している

「さて話を聞こうか」

## 18（後書き）

オリISの名前はどこかの作品からつけさせていただいております  
そしてその作品の者と外見は大体同じものと思っていただけで構いません

「ISのことをすぐに聞きたいところなのだが、山田くん、申し訳ないがこのバカのために氷を取ってきてくれないか？」

「あ、はい。わかりました、すぐにとつてきますね」

そういつて校舎に走っていく山田先生

まあバカは俺のことだよな…うん。でも氷って…もしかして叩いたことに対してなのかな？

違うか…単に人払い？という意味でだな

「さて……そのIS」

武御雷を指さして言う千冬さん  
様になるなあゝ

「取り込んだISなのか？」

「ん？違いますよ？こんなIS見たことないでしょう？」

武御雷の装甲をペチペチと叩きながら言う

「私は取り込んだISを改造したといわれても驚かないぞ。もう一度聞く本当に取り込んだISではないのだな？」

「違います」

まっすぐに千冬さんの目を見る

愛と情熱をこめて!!!!!!!!!!

「お！赤くなっ（パン!!!!!!!!!!）うげっ！」

今の発言は失敗だったな

『あの零時？私のことを説明すれば何も問題なかったのでは？』

おお！そうだな、事情を知ってるんだから素直にそう言えばよかった

そう思い千冬さんを見ると

「んな！」

ふむ、驚いているな

改造できるのは想像できてもしゃべるとは思わなかったのだろう

「俺もさっき初めて喋ったんですけど、まさかAIとはいえしゃべるとは思わなかったですよ〜」

口が動かないからちよつと不気味だけど」

『私はAIでもありISでもありますからコアネットワークを使えば言葉を覚えることなど簡単です』

「…………もうこれ以上のことがあっても驚かないぞ  
とりあえず、何も害はないのだな？」

俺ではなく武御雷に聞く

ちよ、なんかそれ違うような

『大丈夫です、零時の危機であるならば話は違いますが  
それに私はあくまでIS、規格外なのは自分でも理解できますが平  
均に愛された零時が操縦者なのですから害はありません』

「その言葉忘れるなよ」

だから俺に言うてくださいよ！っと思うが口に出して言えるわけが  
ない

だって叩かれそうなんだもん

つかAIの癖に俺をバカにしたよな？！平均なめんな！！！！！！

「阿部く〜ん！氷もつてきましたよ〜」

ある少女が一夏のクラスを聞き、そして自分のクラスのクラス代表を代わってもらおうとしている頃

俺と一夏は部屋を訪れたのほほんさんたち一組のメンバーに誘われて食堂へ来ると

パン！パン！

クラッカーを乱射され「織斑くん！クラス代表オメデトー」と一組全員に祝われていた、本人が喜んでいるかは別としてだが

クラスメイト達はわいわいと楽しんでいる

そして箒とセシリアに挟まれて座っているあまりうれしそうにしている一夏の顔を見て笑っている俺

「くくく、よかったな一夏、クラス代表おめでとう」

「そうだねー、これでクラス対抗戦も盛り上がるね」

「ほんとほんと、同じクラスになれてよかったよー」

と、俺の言葉に賛成するようにクラスのみんなが賛成してくる

そのあと黛 薫子という2年の新聞部がやってきて専用機もちにインタビューをした後写真を撮って終わった

そして翌日

「ねえねえ、2人とも転校生のこと聞いたー？」

朝学校に来て座った途端に一夏と俺は話かけられた  
転校生？

『鳳 鈴音、中国代表候補生。2組へと転校してきたようです』

ああそうそう、実は武御雷ことタケミ（悠がつけた、理由は武御雷  
が女性をモデルにしたA Iだからだそうだ）が出現以来、個人間秘  
匿通信で俺に話してくる

俺だけ聞こえるようになっていてるせいか最初は驚いて声に出して驚  
いたり、授業中声に出してみんなからちよつと心配されたこともあ  
った

事情は一夏、箒、セシリア、悠、楯無に教えてあった。このメンバ  
ーはいつも放課後訓練しているメンバーで俺らの中ではすでにいつ  
ものメンバーとなっていた

たまーに一夏が更識妹の簪？って子のところに行っていることもあ  
る、その日は箒とセシリアが暴れるので、あまり展開（出てこない）  
しないタケミも展開しての訓練となる。

ちなみ授業でアイギスが展開しなかったのはタケミができないよう  
にしたらしい

タケミ曰く『私の武器を使用許諾いたしますのでご自分で戦うのが  
よろしいかと』と言ってカーボンブレードと突撃銃を渡して展開は

しない、一度アイギスではなくタケミを展開しようとしたが『私は乗ることを主にしていないので展開できませんよ、それに展開するのは自分の意志です』ともいい、『私が守ったとしても零時が強くなければ守った意味ありませんしね』とも言ってやがった。

『「いつも思うのだがいったいどこからそういう情報もってくるんだ？」』

『秘密です、それよりも一夏たちの話が進んでいますよ』

おっと、いつまでもタケミと話してらんないな

「——その情報、古いよ」

聞き覚えのない声が聞こえる方を見ると

『あの少女が転校生のようですね』

ほう、天使きた！よし！今の俺にストッパーはない！  
転校生に声をかけるべく近寄ろうと席を立つと

「ストッパーねえ……クスクス」

背中がゾクツとしたのでおとなしく席に座り直した  
ちなみに俺は口とりとコとンではない、ただちよつと背が低い子が好きなだけだ

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝できないんだから！」

おお、元気がいい子だな  
なかなかの好感触じゃないか？

「鈴……お前鈴なのか？」

ん？一夏の知り合いか？

これはあれだな、一夏を追いかけて来たの！的なやつか？  
この恋愛原子核め！

「そうよ。中国代表候補生、凰 鈴音。今日は戦線布告に来たってわけ」

決めた決めた、つか転校したばっかでこんなことができるのか  
よ良いな

「何格好つけてるだ？すげえ似合わないぞ」

うわ！

ブレイク！みたいな？

「んな！なんてこと言うのよアンタ！」

まあそうなるよな

「おい」

「なによ！？」

パアシン！

お！千冬さんだ

「もうS H Rの時間だ、教室に戻れ」

「うっ！またあとで来るからね一夏！逃げないでよ」

どうすれば逃げたことになるのだろうか？

そのあとの授業はウケた、さっきの嵐のことが気になるのか授業中何回も千冬先生叩かれていた

それを見て笑った俺も叩かれた・・・

## 昼 食堂

「待ってたわよ、一夏！」

転校生か、ご苦労だな

「あの子、一夏のこと好きだね」

「お願いだ悠……いつの間にか近寄って腕に抱きつかないでくれ……」

いつもの事になっていて男としても、柔らかいものが当たって嬉しいのだが……悠は勘違いしてるから手を出すわけにはいかない、

まあ悠じゃなくてもそうなのだが

「はあ……これからはレイちゃんを一夏予備軍って呼ばうかな……」

「ん？なんか言ったか？それより楯無はどうしたんだ？」

「…………知らない！もう一夏たち行っちゃったよ！」

今の話題は失敗か？まあ……そうだな

「ちょ！悠まで置いて行くなってば」

今日の放課後の訓練が終わって更衣室に行くと

「はい、一夏。飲み物はスポーツドリンクでいいわよね？」

そういつて一夏にタオルとスポドリを渡している凰

「おう、サンキュー。零時も飲むか？」

「いや、凰に悪いからやめておく」

頭に？マークを浮かべている一夏

「俺は安部 零時、よろしくな」

「凰 鈴音よ、よろしく。一夏と同じで鈴でいいわ」

挨拶をした後

「んじゃ俺も零時って呼んでくれて構わない。それでちょっと耳を貸せ鈴」

チヨイチヨイと指で呼び寄せる

「俺一夏と同室なんだ。今日は部屋に1時間半後ぐらいに帰るから一夏と話したらどうだ？」

「ほ、ほんとに?! 零時っていいやつね!」

「なんだよ、俺の前で内緒話かよ」

拗ねたように抗議してくる一夏

「まあ悪口じゃないんだ気にするな、んじゃ俺もうちヨイ訓練するから」

「それなら俺も付き合っぞ?」

「いや大丈夫だ、タケミ相手にやりたいからお前は先に戻れ」

「ああ……わかった」

そういつて俺はアリーナへと戻った

アイギスを展開すると同時にタケミも展開した

『私相手にはいい度胸ですね零時』

「うっせ」

『今日は行動しながら私にハッキングしてください』

「ああ、わかった」

『では、開始！』

開始を合図に三次元躍動旋回をしながらタケミの突撃銃の弾を回避しつつ、アイギスへも意識する

電子攻撃はアイギスに意識をすることでアイギスのコアネットワークから攻撃をするものらしい

この感覚をつかむのは大変だ、相手のコアへ侵入するような感じでやると攻撃できる感じだ

最初はコアネットから攻撃したいところ目標へ攻撃することすらできなかつたし時間かかるし止まっていけないと発動すらできなかった今では時間はかかるが移動しながらできるようにはなった

『その侵入速度では先にアイギスのシールドがなくなりますよ、アイギスはもともスペックも低いしシールドエネルギーは450と少ないのですからシールドエネルギーには気を付けないといけないのですよ』

「くっそ！んなことわかってる！」

『おしゃべりする暇があるとは思いませんでした』

今まで突撃銃での攻撃が突撃銃＋カーボンブレードでの接近戦まで加わった

そこからは圧倒的な力の差でボロボロに負けた

『強くなってください零時』

アイギスが解除され大の字になって寝ている俺に声をかけてくる

「ああ……」

『あなたは強くなれます、実際侵入率も日に日に上がっています、私の主なのだからそうなってくれなければ困るのですがね  
さて時間もいい具合ですし部屋に戻りましょう』

「了解つと」

着替えて部屋に戻ろうとして部屋近くまで行くと  
自分の部屋から鈴が飛び出てきた

俺が見えていないのかすぐそばを通過して走って行ってしまった

「泣いてた……よな」

『一夏のせいだということだけはわかりますね』

「それは俺にもわかる」

お昼 食堂

「ケンカした相手と対戦とかやるな一夏」

「別に俺のせいじゃないぞ」

「鈴が怒ってるのはお前のせいだろー」

つと、そういや今日はクラス対抗前の最後のアリーナ使える日だったな。悠、楯無、お前ら今日一夏のこと徹底的に見てやってくれな  
いか？」

「一夏の訓練を見るのは私の役目だぞ！」

「一夏さんの訓練を見るのは私でしてよ！」

と、一夏ハーレムに言われた

「俺だって意味がなくて言ったわけじゃない、いつも一緒に訓練してるが基本悠と楯無は俺を見てる、箒とセシリアは一夏を見てる、これじゃあいつも同じ相手で癖がつくだろ？だから今日は相手を変えらるってわけだ。それにお前ら2人に勝てるのか？」

最後の勝てるのか？発言で2人が「うう」と言い始めた

「私クラス代表なのけど？」

「学園最強が何を言うか、後輩のために頑張ってくれ楯無」

「私今日から生徒会のことと忙しいのよ？人でも足りないし」

扇子をバサッ！と広げて不足という文字を見せてくる

ふむ………つまり

「わかった、手伝うからお願いできないか？」

「オーケー、お姉さんが一夏くんを鍛えてあげるわ」

今度は祝という文字で見せてくる

「悠はどうだ？」

「んゝ、私はいいや。レイちゃんと一緒にいらればそれでいいや」

予想外だった、正直デートとか言われると思ってた

「大人だね悠は」

「たーちゃんだって大人だよ。とりあえず一夏のこと面倒見てあげる」

頼んだ、と言って話は終わった

そして放課後

「待ってたわよ一夏」

アリーナに入ると一夏を待っていた鈴に出くわす  
しかも不機嫌オーラ全開で

「それで一夏、アンタ反省した？」

「なんでだ？」

言葉だけで見れば一夏も怒って見えるかもしれないが一夏は本気で  
なんでかわかってないな

「なんでって！私を怒らせて申し訳なかったなあ」とか仲直りした  
いなあ」とかあるでしょ！」

「いやなんで怒ってるかもわからないし……なあ零時」

「俺にふるなバカヤロー」

とばっちりくらうだろうが！

「良いから謝りなさいよ！」

おおう、それは強引すぎというか理不尽ではないか？  
してないのに「アンタ痴漢したでしょ！」ぐらいに理不尽だ

「だからなんでだよ！約束覚えてただろ！」

「意味が違うのよ意味が！」

意味が？沖縄料理のミニガー？

「レイちゃんきつと一夏と同じこと考えてる」

ORZ

「あつたまきた！こうしましょう！来週のクラス対抗戦で勝った方が負けた方になんでも1つ言うことを聞かせられるっていうのはどう！！」

「いいぜ！俺が勝ったら意味を教えるよな！」

そして一夏が勝って意味をして一夏は鈴と付き合ってますね！ええわかりますとも！

「わかったわよ！覚悟してなさいよね！」

「お前こそしてろよな、バカ！」

「バカとは何よバカとは！この朴念仁！間抜け！アホ！」「女ったらしー！」「黙ってなさい零時！」「はい…」「バカはアンタよバアカ！」

お前らガキか？

「うるさい貧乳」

ドガアアン!!

この時音が鳴ったのは鈴が腕をIS化させて壁を殴ったような跡を作ったために音が鳴った

おいおいマジかよ……壁まで結構あんだぜ？勝てんのかよ一夏……

「す、すまん、今は謝る」

さすがにヤバイと思ったのか素直に謝る一夏

「許さない！絶対に許さないからね!!!!」

そういつて走ってアリーナから出て行ってしまった

「しまったな……」

「そうだな……なんにしても鈴には冷静になったときもう一度謝らないとな」

「ああ……そうだな」

パン！と音が鳴りそちらを向くと楯無が手を叩いていた

「今は彼女に勝つことだけを考えましょう」

「一夏が言ったことはもう言い返せないの……だから今は過去じゃなくて未来を見て」

楯無と悠の言葉にうなづく一夏

「それにしても……」

俺がさっき鈴が破壊した壁を見る

「そうですね…おそらく接近戦パワータイプではないかと」

セシリアが壁を見て鈴のISのタイプを予測する

「じゃあ今日は私じゃなくて篝ちゃんの出番ね」

自分ではなく篝の出番だという楯無

ちなみに最初は篠ノ之さんと言っていたがいつのまにかちゃん付けでセシリアもちゃん付けになっていた

「なんでだ？」という俺……俺はバカじゃないんだからな！

「単純に私が剣術が使えるからだろう」

腕組みをして理解している篝

「なんでだ？」

……一夏と俺は理解できてないようだ

「一夏は雪片式型だけだからだよ。それでどうしてかというと、パワータイプの接近戦になったときに雪片でうまく攻撃をそらす練習をするためってことだよ」

俺と一夏が何度もなんでだ？と言わなくて済むようにわかりやすく

解析をしてくれた悠

「なるほど、まともに攻撃を防ぐじゃなくて捌けるようにすることか。じゃあ楯無とセシリアは俺の訓練に付き合ってくれよ」

「じゃあ今日は私対2人の模擬戦をしましょう。セシリアちゃんもそれでいい？」

「構いませんわ」

「じゃあかかってきなさい」

余裕って顔でいる楯無

「その余裕面がいつまで続くかな楯無!!」

## キャラ容姿紹介（未完成）

あへ  
安部 零時

どこにでもいる平凡な少年

きっと世界中が顔を見てふつと答えるだろう

平均と半分の称号を持つ男

→実は半分が使いづらくてどうしようと困っている主

悠の積極的なアタックに困っていない（だって男の子だもん）がいろいろと事情があつて悠の気持ちには答えていない？

悠を怖がったり避けている言動があつたりするが別に本当にそう思っていないかもしれない？

ツンデレじゃないんだから！↑どうして今これが来たか主にもわからないw

相沢 悠

マブラヴTEのクリスカを幼く笑顔が似合う子（デレデレの子）&髪を長くしたら主の頭にいる悠に会えるよw

積極的に零時にアタックするがなぜ零時が気持ちに答えないか理解しているため、アタックも限度は理解している つもり

相沢 巧

イケメン

巧はイケメン

・ ・ ・ ・ ・ 申し訳ありません  
これはまだ未完成です  
更新したらお知らせいたします

## 生徒会室

「のほほんさんがいるとは驚きだ……」

「えへへー、すごいでしょー」

今実家に帰ってていないけどお姉ちゃんもいるんだよ」

にんまり笑顔でダボダボの袖を振り回しながら言う

いつものほほんとしていたので生徒会にいるとは思えないな

「仕事できんのか？」

あれ？ ってことは実はのほほんさん強いのか？」

「生徒会長は最強でなければいけないけど、他のメンバーは定員数になるまで好きに入れていいの」

なるほど……… ってことは生徒会長次第で最強の生徒会ができるかもしれないと……… 恐ろしいな

下手したら国にケン力できるかもしれないってことか

「そうだ！ ちょうど定員が空いてるから「遠慮しておく」零時も「やらない」一緒に「やらん」……… そんなにお姉さんのことが嫌い？」

長い机（アニメでよくある学校にある長くてたためる机）を挟んで座っていた楯無がグイッと机に手についてこちらに近寄ってくる、そうすると自然と目線がある一部に……

はう！見える！見えてますよ谷間が楯無さん！

「どこを見てるのかな零時？」

零時ねえ…最初レイちゃんって呼ぼうとして悠に怒られてたっけ  
束さんも呼んでるレイちゃんなのになんで楯無はダメなのだろうか？

「急に違うこと考えてもだめだよ。それにしても今日はちょっと暑いね」

そういつて胸元をつまんでパタパタとし始める

「……………ピンク」

「あは、えっち。はいティッシュ、鼻血出てるよ」

「おう、サンキュー」

そのあと悠が来て抱きつかれた際にもう一回鼻血がでた

そうしてクラス対抗戦までの一週間は楯無との約束で生徒会の手伝いをして過ごした

クラス対抗戦当日

『それでは両者規定の位置に移動してください』

アリーナのアナウンスに促されて一夏と鈴が向かい合う

「いよいよか……」

箒がビットのモニターを見ながら言う

ここには1組教師陣といつもメンバーがいた

「お前らここにいていいのか？」

悠と楯無に向かって尋ねる

「私の試合は1年生のあとだし問題ないわよ」

「それに私とたーちゃんだって一夏の関係者なんだから大丈夫だよ」

「と、言ってますがどうなんですか？」

今度はそれを千冬先生に聞く

「構わん」

一言ですか……弟が心配なんです  
ねこのブラコンが！

「何か言ったか？」

ギロリと怖い目で見られる

「いえなにも」

『それでは両者試合を開始してください』

ビー！とブザーが鳴っている途中で両者が動き出した

一夏はもちろん雪片弐型

対して鈴は青竜刀を改良したようなを出し戦闘を始めた

「よし！初撃は防いだな！」

ぐつと手を握って自分のことのように喜ぶ俺

しかしそのあとの猛烈な鈴の攻撃で防戦一方になってしまふ一夏  
それを脱するためか距離を置こうとする一夏

そして離れようとしていた一夏がいきなり何かにぶつかったように  
地面へと落ちて行った

交通事故にあつたみたいだ

「ちょ！なにあれ」

「衝撃砲ね」

抱きつきながら解説をしてくる楯無

「衝撃砲……確か、空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生  
じる衝撃それ自体を砲弾化して打ち出す——でしたわね」

「砲身と砲弾が見えないのが特徴みたいだね、第三世代つてところかな」

セシリアの細かい説明に補足を入れてきた悠

「見えないのによくかわせるな一夏『失礼します！』おわっ！」

突然展開したタケミに抱かれている

『行きますよ零時』

それだけ言ってビットから出てアリーナの中へと入ろうとしている

「おいおい！何やってんだ！今試合ちゅ」試合中どころではなくな  
ります』はい？」

アイギスが強制展開されすぐにディスプレイが出てくる

「これは？」

そこに映っていたのは黒いIS

見たこともないISで、しかも全身装甲だ

『この学園に接近中のステルス機です、今は私の目ですから見えませんが、おそらく学園は気づいていないでしょう。信じるかはわかりませんが千冬の居た部屋の端末にはこのことを知らせておきました』

そんなやり取りをしているうちにアリーナへついてしまった  
そして観客席にはすでに防壁が閉まってあることにも気づいた

ドオオオオーーーーン!!!!!!

『タイミングはぴったりのようです』

アリーナのシールドを突破してアリーナ中央に降り立つ黒いIS

『「なっ、なんだ?!何が起きてるんだ?!」』

『「一夏!試合は中止よ!すぐにピットに戻って!」』

何が何だか慌てる一夏と冷静に一夏に指示をだす鈴  
さすが代表候補生だな

『アリーナから出るのは無理です、侵入してきたISにより不可能  
になっています』

ああですが一夏の零落白夜を使えば逃げることはできますね』

挑発するように言うタケミ

こいつホントにAIか?

『「逃げる?そんなことするわけないだろ、アリーナってことは見  
に来てたみんなが避難できないってことだろ?なら楯無さんとか先  
生方にみんなを助けてもらってる間俺たちが食い止めるんだ」』

『一夏ならそう言つとわかっていました。聞いていましたね千冬そ  
ちらは任せました』

『「機械の言うことを聞くのはどうかと思うが良いだろう。山田くん、アリーナへ向かった先生方を救助の方へ向かわせてくれ」』

後半ちょっと指示が聞こえたがタケミの言うことを聞いてくれたみたいだ

あれ？そういう機械系ならアイギスの電子攻撃で何とかなるのでは？

『零時にはあの黒いISを取り込んでもらいます』

「ちょ！取り込むって！あれISだろ？ISって国家、企業の属してるんだろ？！俺犯罪者にはなりたくないぞ！！それに電子攻撃で先生のサポートしてた方が俺は性に合ってるんだが？！」

『まだ確信はありませんがああISはどこにも属してないでしょう。取り込んでも問題ないでしょう。だからこそサポートではなく今回はああISを取り込んでいただきます』

「どこから（バシユン！）おわ！」

侵入してきたISの攻撃を寸前でかわす

『まずはああISを止めるのが先決のようです』

そういつて俺にカーボンブレード、突撃銃、盾を渡してくる  
ちなみに盾の後ろに装備を付けれるようにしてあるから今は盾にカーボンブレードをセットしてある

「コレお前の装備だろ？お前の装備ないじゃないか」

『これは私の後付装備です、初期装備は今まで使う必要がなかっただけです』

両肩、腕が光り武器を展開している

手には雪片に刃の部分が真剣になっていて機械と刀融合している刀  
逆の手には試製99型電磁投射砲

両肩には可動兵装担架があり突撃砲が装備してある

『試製99型電磁投射砲はレールガンですが……威力が高すぎるのでしましょ』

そいつって電磁投射砲の代わりに短刀をだす

「武器の種類あつていいなあ……」

俺の心から出た言葉だった

『一夏はアリーナの端で待機してください、鈴と私は前衛であのISの注意を引きます、零時はあのISの無効化が終わるまでサポートです』

タケミが指示を飛ばし各機動き始める、かと思いきや

『「なんで俺が待機なんだよ」』

『「ちよつと何よあのIS?!あのISも全身装甲?!」』

反抗する一夏ともう一機の全身装甲が出てきて、しかもそのISが指示を飛ばしてくるから戸惑う鈴

『「織斑、凰!今はそのISの指示に従え!これは命令だ」』

アリーナ全体に流れる千冬さんの命令

しかしタケミは信用されてるな……来たときに防壁が閉まってたところからもわかることなのだな

『ということなのでよろしくお願いします。私が鈴に合わせるので』

鈴はお好きに戦ってください」

「言ったわね！ついてこれなくても知らないわよ！」

「鈴こそしつかりやってくださいね」

2人が所属不明機ISに立ち向かって行く

あれが三世代機の力なのか？相手の不明機も速いが、鈴とタケミのコンビネーションによってその速さも生かしきれてない

鈴の衝撃砲を避けたところにタケミが待ち構えていて、その隙に鈴も接近をして青竜刀でダメージを与えていた

「アンタ名前は？」

「武御雷です」

「いやISじゃなくてアンタの名前よ」

鈴がタケミのことはのことを知らないのを忘れていた

「私は……タケミです」

「そう、よろしくタケミ」

この会話中も戦い続ける2人

今の俺では2人の半分ぐらいの強さでしかないだろう

平均と半分か……でも俺は東さんにISのことを教えてもらった。

それこそ世界と比べて平均以上半分以上知っていると思う。今はそれだけで十分俺の地震につながるってもんだ

しかしだな……………

「俺のサポートなんかいらねーじゃねーかお前ら！」

『「俺なんて待機だぞ！なんで俺だけ待機なんだよ！」』

「お前はエネルギー残量少ないからここぞという時の零落白夜のための温存をかねての待機だからいいじゃねーか」

『「そうだったのか…気づかなかった…。なあでもそれよりもあのIS、なんか変じゃないか？」』

「変？変ってどこがだよ？」

『「なんか機械じみてないか？」』

機械じみてる？

ちよつと侵入してみるか……

『「何言ってるのよ一夏、ISはもともと機械じゃない」』

『「そうじゃなくて、無人機みたいな……タケミの劣化版みたいな」

』

『私の劣化版ですか……どうなのですか零時』

「確かにそうみたいだな……人が乗ってないのは確かだ」

『では遠慮なしで行きましょう。一夏は全力の零落白夜の準備を、

私たちはあのISの動きを封じます』

「封じるって言ったってどうするんだよ？」

『地面に落とせば動きも制限されるでしょう。その時が一夏の出番です。よろしいですね？』

『「応」』

一夏は準備

そして俺たちはISを落とすために上からの攻撃に切り替え攻撃を開始する

「ちょこまかと避けやがって！蹴りでもくらわせてやりたいぜ」

『良いですねそれ。では！』

ポロつとでた愚痴できっかけを得たのか上空に上がり不明機の真上から急降下をして踵落としを決めて地面に落とした

しかし勢いで右足がくるぶしのちよつと上から壊れてしまった

『今です一夏』

『「うおおおおお！！くらええ！！！」』

地面に落ちていたISの頭を切って破壊する

そして立て続けに両腕も破壊して一夏のISが解除された

「終わったみたいだな」

壊れた不明ISに近寄っている

『いえ、終わっていません。それにこのISも機能停止はしていません。コアが生きている限り生き続けるでしょう……私のように』

なくなった右足を見ながら言うタケミ

『「あわわ！タケミアンタ足！！！！絶対防御はどうしたの！！！！！」』

鈴が慌ててタケミに近づいている

『落ち着いてください私は大丈夫です。それよりも零時、今のうちにISを取り込んでください、コアは胸のところにあるやつです』

「ああ、わかった」

不明ISの前に立ってコアを発見する

後ろから鈴が慌てている声がまだするが無視だ

「す〜は〜、す〜は〜。よし！」

深呼吸をした後、気合を入れてコアに手を触れる

ここはどこだ？真つ暗な空間……さっきまであのISの前にいてコアに触れたことまではつきり覚えている  
するとここはコアの内部？コアそのものってことなのか？

——あなただ〜れ？

声の聞こえた後ろを振り向くと無表情の黒髪の子供がいた  
黒いワンピースを着ているから女の子なのだろう  
女の子の目線に合わせてから言う

「俺は安部零時、君は？」

——わたし？わかんない

首を振って応えてくれる

それにしてもこの子はなんなのだろう

——でもおにいちちゃんがさっきわたしがこえをかけたのにへんじしてくれなかったよ

さつき？さつきってもしかして無人機が調べるときに侵入したときってことか？

もしコアに侵入したときだとしたら、コアにこの女の子がいることになる

あの時俺は人を探していたから見つけられなかったのかもしれない

……

ということは実はコアには人格のようなものがあるかも知れないってことか？

じゃあタケミも実はAIではなくコアの人格なのだろうか？

束さんならAIも作れそうだし、コアに人格を作ったりすることもできるかもしれない

その時服に違和感を覚え見てみると女の子が袖をギュッと握っていた

——こわいかおしてる

「脅えさせちゃったか？」

ぶんぶん頭を振って応えてくれる

——くらい、こわいの

なぜだろう……この子を助けなければいけない気がする

「ココにいたくない？」

——？

彼女にとってココの空間こそがすべてだったのだろう、俺がいたくない？と聞いても何が何だかわかっていない様子だ

「ん〜と、お兄ちゃんを信じてくれる一緒に来てくれる？」

——うん

「本当にいいの？」

——うん、いつしょにいる

「よし、じゃあ行こうか」

立ち上がって女の子の手を握る

——うん

その時だけは笑ってくれた女の子

俺はこの子を取り込むんじゃなくて助けるんだ

「うっ  
」

目を開けようとしてまぶしくてまた目を閉じてしまう

「起きたようだな」

まだ目を開けていないから見ていないがこの声は

「千冬さん…ですか？」

「ああそうだ、ここは保健室だ。そうか…1日寝たきりだったから目が慣れていないのか」

「1日？ああ、そういやコアに触れて女の子に会って……それで今につて感じが」

「女の子？あの時コアに触れたお前は気絶して保健室に運ばれてからずっというが女の子なんて見ていないぞ」

微妙に女の子って言ったとき顔が怖くなりましたよ千冬さん？

やっと目が慣れてきて目を開けられるようになった

どうやら俺はベットで寝ていて千冬さんはそばにあるイスに座っている

「いや取り込もうとしてコアに触れたあとに会ったんです。夢とかじゃないと思います、きっとあの女の子は不明ISのコアにある人格の形が女の子として現れていたんです、まあ俺の想像でしかないんですがね。千冬さん？」

何やら話の途中から考え後事始めてしまった千冬さん

「あのー千冬さん？聞いていらっしやいますか？……いたずらしますよ？」

反応がない、ただの屍のようだ

「少し考えごとをしていただけた」

そのまま考え中ならば触れたものを……

「それより今何時ですか？」

「ちょうど1時あたりだな」

手に付けている腕時計を見ながら答えてくれる

「タケミから聞いたのだがISの取り込みは無事終わっているそう  
だ」

そういつてイスから立ち上がった部屋のドアへと向かう

「そういえば相沢妹と楯無が心配していたぞ。じゃあな」

千冬さんが部屋から出ていき、眠気が襲われそのまま眠りについてしまった

放課後    アリーナ

「もう大丈夫なの？」

心配そうに尋ねてくる悠

「大丈夫だって、別に怪我したわけじゃないんだから。悠こそ心配かけて悪かったな」

「ホントだよ、たーちゃんと一緒に心配したんだから！」

「それでそのたーちゃんはどうしたんだよ？」

「今日は生徒会のお仕事だって」

「忙しそうだな、あの事件があつたばかりだし」

「そうだね、でもあのIS取り込んでどうしたの？ 今日試してみるの？」

「いやなんか今朝『取り込んだISを調べますので私が呼びかけるまで、私とこのISは使えません』って、『ああ武器は使用許可しておきますので好きに使ってくださいって』って言った後連絡が取れない」

「そっかぁーじゃあいつも通り訓練あるのみだね。あつ！そっいえ

「は昨日から鈴ちゃんが加わったの」

鈴か…… そういえばタケミのことは説明したのだろうか

「それはタケミが自分でしてたよ」

「んじゃ気にせずやるか！」

「うん！私を倒せたら夕飯のおかずあげちゃうよ」

「お前に勝てて褒美がそれかよ、まあいいや。いくぞ！」

カーボンブレードを展開して瞬間加速で間合いをつめて切り付けようとするが、悠は装甲を腕に付けて太くしてきた

「え？！そんな使い方ありかよ！」

その太い腕で殴り掛かってくる  
それを見てサイドステップで避けて、ブレードから突撃砲に変えてからバックして撃ちながら逃げる

「ダメダメーまだACfAやってる方がいい動きしてるよー。ISは自由に動けるんだからもっと三次元移動しなきゃだよー」

そういいながら今度は装甲ではなくブーストを装備した悠が接近してくる

近づいてくる前に突撃砲の逆の手にブレードを展開させておく

「それも私相手じゃダメだよ」

接近してきた悠が瞬間加速でやってくる

それは予想していたからブレードで太刀打ちしようとする

しかし寸前で重装甲に変わりそのまま武器を展開せずに殴ってきた

当然俺はブレードで太刀打ちしたが一本の力でどうにもならず殴り攻撃をくらって吹っ飛んだ

その吹っ飛んだ俺を

俺吹っ飛ぶ↓軽装甲↓接近↓重装甲↓殴る↓俺吹っ飛ぶ↓軽装甲↓  
接近

でなす術もなくシールドエネルギーをすべて持って行かれた

「完敗かよ……自信なくすぜ」

アリーナの観客席で一夏たちがまだ訓練しているからその姿を見ながら話す

「アイギスはもともと戦闘で勝つための仕様になってないから仕方ないよ」

「でもあの装備の切り替え早いのな」

「あれはISの能力じゃなくて私の実力だもん、あれちゃんと名前があって高速切り替え（ラピッド・スイッチ）って言うんだよ」

腰に手をあてた自慢げに言う

しかしそれに見合う努力はしているのが今の俺には分かる

俺にはあんなことできない

「稼働時間も違いすぎるし俺センスないし……勝てねーよなあ……」

「ダメだよレイちゃん！弱気になったらレイちゃんじゃないよ」

「お前は俺をどんな風に見てるんだか……でもここまでばる負けだとな」

「じゃあ戦い方を変えようよ。アイギスにあつた戦い方をすればいいんだよ」

「アイギスに？たとえば？」

急に視線をそらす悠  
考えてなかったな

「一夏は雪片式型を信じてそれを活かすために戦ってる  
セシリアちゃんはビットをうまく活かすための距離で戦ってる  
みんな自分に合うスタイルで戦ってる。じゃあレイちゃんはどんな  
スタイルで戦いたい？」

「どんなスタイルで？」

「急いで決める必要はないよ」

「いや決まってるよ。俺はみんなのことをサポートできるように  
りたい」

「レイちゃんは変わらないね……誰かのためになら自分が犠牲にな

「つてもいいんだから……そんなレイちゃんだから好きになったんだよ？」

「思わぬ告白にびっくりする

いつも聞いているから気にしないがな！

「顔赤いのに？」

「うるさい／＼／」

「ふふふ、じゃあ明日からはアイギスに合う戦い方を一緒に探そうか？」

「ああ、それで頼む」

「そうして2週間がたった時

「今日はお姉さんが2週間ぶりに相手をしてあげる。なんだか戦い方を変えたって悠が言ってたけどそんな付け焼刃でお姉さんに勝てるかしら？」

「勝てなくなっただけいいんだよ、楯無で通用すれば問題ないんだよ」

「欲がないわね。お姉さんに勝ったらいいこととしてあげるわよ？」

「よし！勝ってやる！」

「レイちゃん、買ったやうと生徒会長だよ？」

怒ると思ったがやさしく諭してくる

「あら？怒ると思ってたのに意外に冷静ね」

「ふふん、この2週間レイちゃんとずっと訓練一緒にやってたもの、  
たーちゃんとの差は歴然だね」

「言っわね、まあいいわ。それじゃ始めましょうか」

「応」

六月頭

ここまで訓練やらですつと学校にいたが今日は

「あつ！弾！お前何しやる！」

「いくら零兄でもゲームはゆずれないぜ！」

五反田家へ一夏とともに邪魔していた

「俺もいるぞ零時、ここにいることを悠に教えるぞ？」

「やめてください巧様！この2か月理性が持っただけでもほめてくれよ！つか楯無まで加わるから大変だったんだ！つかつか！お前俺がどうして悠の返事に答えないかわかってるだろ？！」

俺にもちゃんと返事をしない理由はある  
ヘタレと言った一夏にもそれは言っており

「あれだろ？相沢兄妹がいじめられてたところを助けたのが零時だつて奴だろ？それで悠が零時を好きになつたつてやつ」

「そうそう、悠は勘違いしてるんだよ。たまたま俺が助けたただけなんだ、だからきつと助けたのが俺じゃなくてもそいつに惚れてたよ」

「まあ兄の俺から見ても悠はあの時に惚れたな……………」  
それとともに俺たち兄弟はお前のためなら……」

「あ？最後なんていつてたんだ？惚れたなって言つてたあとなんか言つてなかったか？」

「お前が知る必要はない、しかしそれだけで悠がお前に惚れているとは思えないがな」

やけに真剣な声で言われ軽くビビッてしまう

ボタン！

ドアを足蹴りしていた女の子がいる

「お兄！さっきからお昼ができたって言ってるじゃん！さつさと食べに――」

天使きた天使！

「かわいいな！君が弾の妹の蘭ちゃんか！よし！ちよつと俺蘭ちゃんと「おい零時、やめとけ」はい」

俺が想像しているモノとは別の感情が頭に入ってくる  
まあ相沢兄妹能力だな、これもまた銀髪黒ウサギの時にネタがわかるだろう

「なるほど……一夏には「待った零兄それは言つてやらないでくれ」おっおっ」

兄って言うのはどうしてこう妹に甘いのだろうか？

「零時の好みって2か月一緒にいてもいまいちわからないんだよな。久しぶり蘭、お邪魔してるぞ」

「え？あの、その、いつ一夏さん？！」

「おう！暇ができたからちよつと家の様子見るついでに来たんだ」

「そ、そうですね」

と、走って一階に下りて行つた

「この恋愛原子核め！」

この日は男4人で騒げて正直楽しかった  
そして一回実家帰って親に会うから先に一夏にはIS学園へと帰つてもらい

門限ぎりぎりの時間にIS学園の部屋へと帰ってきた、のだが部屋の前にいるのは

「あれは箒か？」

「一夏！来月の、学年別トーナメントに私が勝ったら！っ、付き合ってもらおう！」

わーお、学園の寮でそんな大声で告白とはやりますな篤さん  
思わず家からもってきたゲームが入ってる鞆落としちまったぜ

「れ、零時！帰ってきたのか？！」

すまない篤……きつと俺が部屋にいないと思って今がチャンスだと思っただろうな……聞く気はなかったと手を合わせて

「すまん」

「わ、私もここでしたのが悪いのだろう。では、私は部屋へ戻る」

部屋って言っても隣だけだな

どうせなら一夏をそっちに呼んで告白すればよかったのに……むしる優勝しなくてもいいような告白にすればよかったのに



朝教室に入って行くといつにもまして教室が騒がしかった

「なんだ？何の話してるんだ？」

「「「なんでもないよ！」「」」

クラス全員に返答された

ちなみにこの後悠が来て「学年別トーナメントで勝つと一夏かレイちゃんに付き合えるって噂が流れてるよ」と俺だけに教えてくれた

一夏には面白そうだから黙っておこう

そして違う日の登校中

「そついえばあの不明IS事件から一ヶ月だね、まだタケミは応答しないの？」

「んゝ、たまゝに話してくるから壊れてるわけじゃないんだけど…  
…なんか、助けたISの教育で忙しいって言ってた」

「ふゝん、レイちゃんはやっぱり助けるっていうよね……どうして  
」？」

「あの女の子が小さいころの…友達になる前の悠に雰囲気似てた

からってのもあるな……」

「私に？」

「そう、何も知らない子供って感じかな」

「そっか……そうなんだ。よく覚えてたね」

「何言ってるんだよ……あの時の巧はナイフだぜ？俺殺されるかと思っただよ」

友達にある前の巧とケンカ（一方的な暴力だったが）したことがあるあれは確か悠を助けたあとに殺されかけたんだ……でもそのあと悠が誤解を解いた

あとから聞いたのだが当時の悠は無口でしゃべらない子だったらしいとまあそんな悠が必死に俺のことをかばう悠を見て巧は殴るのをやめてくれた

そのあとは……長いからまた今度にしよう

「ふふ、結構覚えてるんだね。もう私たちと会ったときのことなんか忘れてると思った」

「いつあったとかは忘れたが出来事を忘れたことはないぞ」

「そっか。じゃあ、また放課後ね」

いつの間にかついていた教室の前で悠と別れる

教室に入りHRが始まるのを待つ

そしてやってきた山田先生は言った

「今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名ですよ！」

「ええええええええええ！」

どうしてこうこのクラスはノリがいいのだろうか

「どうぞ入ってきてください」

教室のドアが開き

二人の転校生が入ってくる

「失礼します」

片方はズボンをはいている男

「……」

片方は眼帯をした女の子

この教室のメンバーが転校生が入ってき際に静かになった

そして金髪の男が挨拶をした後クラスメイトが騒いでいたみたいだが俺は頭に入ってこない

そして俺が頭に入ってこない理由を作っている本人が喋りだす

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

自己紹介が終わった後思わず立ち上がってラウラ・ボーデヴィツヒの前に立っていた

「ラウラ・ボーデヴィツヒって言ったな……お前第何せ（バアン！）イッて！」

頭を叩かれた、叩いた本人は見なくてもわかる

それに今俺はこのラウラ・ボーデヴィツヒという銀髪の女の子から目を離せないでいる

「落ち着け馬鹿者……それにここで聞くことではない、放課後にでも聞け、ではHRを終わる各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合しろ、織斑と阿部はデュノワの面倒を見てやれ同じ男子だろう」

千冬さんが強引に話を進めてボーデヴィツヒと話をさせてくれなか

った

そのボーデヴィツヒはすでに教室から出て行ってしまっている

「おい零時！しっかりしろ！置いていくぞ！」

一夏に揺さぶられて意識が戻ってくる

「……ああわかった」

そういつてアリーナの更衣室へ走っていく

更衣室

「なあどうしたんだよ零時…ボーデビツヒ？ボーデヴィツヒ？つてやつ見てからおかしいぞ？」

おかしい…確かにそうかもな……

仕方ないだろう……銀髪を見てしまつとどうしても疑ってしまうのだから……

「悪い…ちょっと整理がつかなくて…、っとこんな時間だ。早く着替えないとな、デュノワも早くしないと怒られる…ってもう着替えてたか」

「お！早いなシャルル！」

「え？そ、そうかなハハハ」

「大変だなお前も、俺たちのデータ取りに来たんだろ？実は女だったりしてな」

転入したばっかなので冗談を入れてフレンドリーになると会話を  
する

「何言つてんだよ零時　って時間ヤバイヤバイ！」

一夏に言われて時間を見ると1分前だった

「デュノワ顔青いが大丈夫か？」

「だ、大丈夫大丈夫アハハ」

ちよつと乾いた笑い方だが初日だ。まだ緊張しているんだろうな

グラウンド

「遅い！」

と鬼教官からの指導は免れなかった

## グラウンド

今日は一日IS授業で二組と合同実演らしく鈴もいて、千冬さんに前に来いと鈴とセシリアが呼ばれ

対戦をするとのこと、そして相手が山田先生だった

最初一夏の上にふってきた山田先生を見たときは大丈夫か？と思っ  
たが、鈴とセシリア対山田先生戦を見た限りじゃあ下手すると悠と  
良い戦いができるかもしれない

今回は手加減だろうし専用機でもないからむしろ悠並かもしれない、  
けどさすがに楯無以上ではないだろう

まあ結果は山田先生の勝ちで終わっていた

「これで職員の実力はわかっただろう、以後敬意を払って接するよ  
うに。専用機持ちをリーダーとしてグループを作って実習を行う。  
いいな？では分かれる」

一組のほとんどのメンバーは一夏とデュノワに集まり、なぜか二組  
のメンバーが数人俺のところに集まった

「ん？一夏とデュノワのところに行かないのか？」

正直巧いると女の子はみんな巧へと流れていくから今回のこれは  
正直に言えばうれしい

まあ小学校から悠が俺に好意を寄せていることが知れ渡っていたの  
もあるかもしれないが……たまにそれで俺が悠を誑かしてる？とい  
うか俺と代われ！みたいなのがあったが巧が排除していた…

なんでも「我が妹の恋路は兄が守る！」だそうだ、素晴らしいなシ

スコン

まあそれで女の子から巧様から離れて！って言うのがあったけどね

……

「鈴ちゃんを見てると織斑くんはちょっと…鈍いからですね」

まあ確かに鈍いな

「デュノワくんは女の子って感じだから私のタイプじゃないですね」

これはそういう選び方なのか？

「織斑くんは守ってくれるタイプで、デュノワくんは守ってあげたタイプ。安部先輩は年上ってこともあって大人ですしいつも一緒にいてくれるって感じなんですよ」

先輩か…一組にいと忘れろが俺年上なんだよな  
悠がいるがクラスが違ふみたいな感覚で忘れてた

「安部先輩といれば悠お姉様と楯無お姉さまがついてくる」

そついう子もいるのね……

「この馬鹿者共が！出席番号順に各グループに入れ！さっさとしろ！」

千冬さんの気迫に軍隊のような動いて一瞬のうちに分かれるのが終わる

「最初からそうしないか……」

額を指で押さえながら「はあ」とため息をついている千冬さん教師って大変なんだなとしみじみ思った

ちらつと視界に入る隣のグループの銀髪の方へ視線を向けると

「ねえねえ、朝阿部君になんか言われてたけど知り合いなの？」  
「専用機持ちつてすごいね」

とか転校生に聞く質問で話しかけていた

そして1人の女子がボーデヴィツヒを触ろうとしていた  
状況からして「髪きれいだね」みたいな感じだった

そして俺は見ていてわかった  
ボーデヴィツヒの腕が触ろうとしている彼女の顔を叩こうとしていることを…

「やめろボーデヴィツヒ」

アイギスを展開して顔にあたる寸前のボーデヴィツヒの腕を捕まえて止める  
眼帯をしていない目で睨まれている、その眼は昔の巧にそっくりだった

「勝手にISを展開するなっ」

「なっ」のところで出席簿アタックをくらう

痛くはなかったがエネルギーが減っている……絶対防御が発動したのか？

「まあいい、事情は見ていた。阿部は自分のグループに戻れ」

ここは素直に千冬さんに任せて戻る

きっと俺の想像は間違っていないと思う、でも悠と巧とはちょっと違う能力なのかもしれない

「ごめん皆、おまたせ」

グループに戻り頭を下げて謝り

顔をあげると顔を赤くしたグループのメンバー

授業が始まっても赤いのは治らず、一夏のところでお姫様抱っこで運ぶのを見たのか俺のグループでもやりだした  
苦笑いするしかなかった

そして午前の授業が終わり

昼一緒に食おうぜと一夏に誘われたが断った、そのあとに悠もきた  
が断った……のだが

「わかってるよ、朝からずっと見てたから」

お見通しらしく俺がこれから向かう場所についてきた

そこは通学路の途中にあるちょっとした池があるところにそいつは  
いた

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

名前を呼ぶとこちらを見る

「また貴様か……なぜ私に構う」

「聞きたいことがあるからだ。お前人工子宮生まれだな？」

「なぜ貴様がそれを知っている」

さっきの授業で睨まれているのと違う睨まれ方をする  
明らかに殺気がある

「私がそうだから」

俺の後ろに立っていた悠が前に出てきて言う

「あなたの名前はビャーチエノワ？それともシェスチナ？」

「・・・・・・・・・・」

悠の質問には答えない  
だが答えてもらう必要はない

「違うよこの子……私とは違う所の生まれ。しかもESP能力者じゃない……でも後天的に能力を得てるみたい、ヴォーダン・オージエ？……能力は「もういい悠……無理してみなくていい」……うん、ありがとう」

いつからか泣いていて今にも倒れそうな悠をおんぶする

「ありがとうねレイちゃん」

「ああ、あとは任せろ」

そういつてボーデヴィツヒと向き合う

「い、今のはなんだ……なぜ貴様たちがそれを知っている!!!」

最初何が起こったかわからず驚いていたが気持ちを切り替えたのかさつきまで睨んできていた状態に戻った

「だから言っただろ？違うところの生まれって……悠は……この子は人工子宮で生まれた子だ、君と同じで……でも君はこの子の兄弟じゃないみたいだな」

「なぜわかったのだ！そしてなぜ知っているんだ！機密事項なのだぞ！」

「……こつちも機密事項だから言えない……じゃダメか？」

「ふざけているのか！」

そういつて銃を出してくる  
一瞬で血の気が引いたよ！

「なんてもの出しやがる！あぶねーじゃねーか！」

「黙れ！私の質問に答えないと撃つぞ！」

撃つといわれたら答えるしかないな・・・うん  
良いよな？悠

背中にいる悠がコクンと頭を下げた

「わかった！答えるからその銃を下げてくれ！そんなものあったん  
じゃ離せない、悠をおんぶしながら逃げやしないって」

しばらくたつた後に銃を下げてくれた

まあ握ったまんまだが……

「ありがとう。聞いた話……と言うか俺自体にあったことじゃない  
しから詳しくは知らないが簡単に言うと言昔ロシアに研究施設があっ  
たんだ、そこで事故があつて爆発が起きたんだ。そしてそこで研究  
していたのは人工ESP発現体、そして悠はその実験で生まれた子」  
生まれた……と言うより作られた……悠達はそれが嫌だ……と昔言っ  
ていたが、俺は巧と悠に助けてこられたからどんな理由があれいて  
くれること自体がうれしい

「ESP？超能力のことか？」

「そうだな、リーディングとプロジェクションってわかるか？悠は  
リーディングの能力があるんだ  
簡単に言う可他者の思考をイメージとして、感情を色として読み取  
るESP能力の一種だ。」

このイメージを受け取ったのを色をESP能力者が翻訳して言葉に  
している、そしてそれはESP能力者の経験に大きく依存する  
つまりさまざまな色を見て経験することにより、より他者の感情を

読めるということ

巧はプロジェクション能力で、自分の思考を「イメージ」として他者の思考に投影するESP能力の一種を持っている

本来ならば2つの能力を持った1人が必要だったらしいが双子で生まれてきて能力も別々になったらしい

そして爆発の起きた施設から逃げて悠たちは日本にきて孤児院に拾われた

そこで俺にあった

あの時殺されると思ったの巧のプロジェクション能力で俺に死ぬというイメージを送ってきていたかららしい

今ではクラスメイトをオタクにする程度の力になっているが……

ちなみに巧にはデメリットがないが悠にはある

相手の感情を読む、ということは自分に向けられているすべての感情を見てしまうこともある

悠は容姿が良いだけに女子からよく思われていない時もあった

だからそのせいで倒れたこともあった

今回もボーデヴィツヒのことを見てぎりぎり堪え切れたぐらいなのだろう、疲れるぐらいで済んでよかったと思う

だから「見るのは兄弟を探すためか俺と巧、本当に信じてもいい相手以外に使うな」と言った

ON/OFFの切り替えのために訓練をしたこともあった

「それでボーデヴィツヒの事を言葉で操りながらリーディングをして知った……と言っわけさ」

「なぜわかったのかはわかった……しかしなぜ私に確認をしにきた？」

「……俺約束したんだ。悠には兄貴がいてな、そいつと悠に「家族が見つからないならなら手伝ってやる」ってな……」

実際の家族ではないが研究施設には悠達と同じ子がたくさんいたらしい

結構仲良くもしていたらしく途中まで一緒にいたのだが当時は子供……いなくなっていた子も多く、日本に来るときには巧と悠だけだったらしい

巧に半殺しにされてからは一緒に遊ぶ（一方的に俺が遊ぼうと追いかけてた）ようになり

そして事情……能力を話してくれた日に、公園で3人でいたら俺の親が迎えに来たとき2人が寂しい顔をしていた

それを見た俺は「探せばいい」って「寂しいなら探せばいい」って「家族が見つからないならなら手伝ってやる、約束だ」と言って約束した

「昔はこいつも銀髪でな、施設のほかの子も銀髪って聞いてたから歳の近い銀髪を見ると確認したくなっちまうんだよ」

「……………」

無言で銃をしまった

やっと生きた心地がするぜ

「私のことを口外しなければ危害は加えない」

そういつて校舎の方へと止める前に行ってしまった

「ふう……終わったな」

「残念、終わってないんだ」

肩から悠が話してくる

話しているうちに体力が回復してきたみたいだ

「千冬先生、いるんでしょ？」

木の陰から午前と同じ格好のジャージ姿で現れる  
気づかなかった

「気づいていたのか……」

「さっきの話聞いてたでしょ？私の能力で見えたの、午前の授業が  
終わったあとからずっとレイちゃんのこと見張ってましたよね？」

うわ……俺のせいでか……でも知ってて話しても良いってことは聞かせ  
たってことだよな

「聞いてどうでしたか？私のこと軽蔑しますか？」

なんといわれても大丈夫なように震えている悠のことをやさしく抱  
え直してやる

「何を言ってる、お前たちは私の生徒だ。そして私は教師だ」

「それって卒業したらどうなるんでしょう？」

「むっ……余計なことを言うな零時！」

怒られてしまった

まあ当然か

「アハハ、でも先生の気持ちわかりました。ありがとうございます」

ふん、と言ってそっぽを向いてしまう千冬さん

「ちなみにもう授業は始まっているぞ」

急にこっちを向くと鬼教官がいましたw

「うを！マジだ！」

「お前は相沢妹を保健室に連れて行ってから授業に行け、私は相沢妹のことをクラスに伝えてから行く」

そういつて校舎の入り口で道が違うので分かれようとしたとき

「千冬先生！」

背中にいた悠が千冬さんと呼ぶ

「私のこと……悠って呼んでください」

「じゃあな、悠」

そういつて校舎へ入って行ってしまった

「よかったな？」

「うん！これも全部レイちゃんのおかげだね」

そのままご機嫌の悠を保健室に届け次の授業へと向かうと

「遅いぞ安部！」

再降臨！鬼教官ちふゆちゃん！

バシンー！！

ご指導ありがとうございました

「ようこそデュノワ！やってきました男メンバーだけ！ずっと一夏ハーレムズに囲まれてやっと解放された！男同士で話したいことが話せなかった！しかし部屋に帰ってきた今なら大丈夫！さあはなそうではないか！」

ちょっとテンションがおかしい俺

「あ、あれ？だいぶテンションが違うね？」

午前のテンションとの違いに違和感を感じているデュノワ

「今日が珍しかったただだよ、いつもはコレのちょっと落ち着いた感じ。っていうか一夏ハーレムズってなんだ」

「なあデュノワ……君はなら今日一日一夏と過ごただけでわかったのではないか？」

「あ、あはは……うん、ちょっと同情したよ」

苦笑い全開のデュノワ

「それと僕のことはシャルルでいいよ」

「ああそついやちゃんとあいさつしてなかったな、すまん  
俺は安部 零時、零時って呼んでくれ」

「うん、よろしくね零時」

握手をしながら笑顔で言われる……こいつ……男の娘？！

「お前とことん女顔だな、もしかして女顔だからIS乗れた？」

「そんなこと言ったら俺と零時だって女顔ってことになるんじゃないか？」

「（ ・、ω・ ）ナン…ダト！？平均の俺が女顔だと！」

「こんな時だけ平均に誇り持つなよ！」

俺と一夏がギャーギャー言っている

「クスクス、2人とも面白いね」

なんて言われてしまった

「まあいい、とりあえずこの2人部屋で3人でクラスことになった……ベツトは2つ！ローテかじゃんけんか……ちなみに今回負けたやつ布団も持って来いよ」

「負けて言ってる時点でじゃんけんは決定なんだ……」

シャルルくん…そこは気にしたらダメだ

「よし！オーケー」

「僕もいつでもいいよ」

「  
ポン！  
」

「  
けん！  
」

「  
じゃん！  
」

「  
いくぞ！  
」

「くっ！」ぐー

「布団持って来いよな零時」ぱー

「ごめんね零時」ぱー

俺が行けばいいんだろ！行けば！

布団を取りに行く途中

今日話した銀髪の少女ボーデヴィツヒを見つけた

「ようボーデヴィツヒ、ちゃんとルームメイトと仲良くしてるか？」

食堂の方から来たから夕飯を食ってきたところなのかもしれない

「また貴様が……貴様には関係ない」

それでも皆夕食までには制服から私服になるんだがな

「貴様じゃなくて、安部 零時、零時でいいぞ。それと関係ないって言われても今日あのことを話した相手だ、気にならないわけがないだろ？」

「……いない」

「ん？いない？何が？」

聞こえなかった、ではなく意味が分からなかったんだからそんな怖い顔で睨むなよ

「……ルームメイトはいない」

それでも素直に答えてくれる、意外にいい子？

「いないのか？……お前男と同棲？っていうか男がルームメイトで大丈夫か？」

「軍の同棲など珍しくもない」

軍？ああ、ボーデヴィツヒも専用機持ちつてことは国家、企業に属してつてあれか

「軍か…まあいいや、それで俺たち今2人部屋を3人で使うことになつてんだ、もしよかったらそっちに移っちゃダメか？」

「好きにしろ」

「よし！じゃあまずは千冬さんのところからだな！」

ボーデヴィツヒの腕をつかんで千冬さんのとこまでダッシュ

行く途中みんなから変な目で見られていたが気にしない

大方俺には叩かれそうになった子を助けた、英雄！ヒーロー！って感じが

ボーデヴィツヒには叩こうとしたことでの、いやな奴って感じで見られてる

「お前あんなことするからみんなから嫌われてるぞ？」

走りながら聞くと

「ふん！」

鼻で言われた？！

まあ走ってもちゃんとついてくるあたり根はやさしいやつかもな

千冬さん（寮長室）の部屋

コンコン

ちゃんとノックはしましょう！

「誰だ」

「あつしでこんす姉御」

あつ！今部屋からため息が聞こえてきた  
きつと今額に手を当ててやれやれって絶対やってる！

「入れ……」

「うつす！」

了解が出たのでドアを開けて入る

「失礼します教官」

「ボーデヴィツヒもいるのか、何の用だ」

ちっ！寝巻じゃないか……っと睨まれてる

「実はボーデヴィツヒの部屋にルームメイトがいないって聞いたんで3人の部屋の俺たちの1人をそっちに移れないか許可をもらいに来ました！」

またため息つかれた

「本人がいるということはボーデヴィツヒには確認できているのだろっ……零時、お前ならば許す」

許可キタ——（。。）——！！

「ってなんで俺だけ？」

「悠の誘惑を我慢するだけの理性があるから」

実に納得です！

「悠には自分で言えよ、私は許可しただけだ、私に被害の内容に頼むぞ？」

「イエスマム！んじゃ荷物運ぶから手伝ってくれよボーデヴィツヒ」

「いちいち聞くな、それとラウラと呼べ」

「おーけー、じゃあ行くぞラウラ」

またラウラの手を掴んでダッシュ

2人で部屋を出ていく

出て行った部屋に残る千冬さんが

「あのボーデヴィツヒがあんな風になるとはな」

なんて言ってるとは知らない

そして部屋に行って事件は起きた

バチン！

「私は認めない！貴様があの人の弟なんて私は認めない！」

一夏を叩いた後、俺が渡した俺の荷物を持ってさっさと行って

「何をしている零時！行くぞ！」

「おっ、おっ！一夏、また明日説明するから、また明日な！」

「ラウラはどっちのベッドがいい？」

2人で運んだ荷物はとりあえず置いといて部屋の取り決めについて話す

「どちらでもいい」

「なら俺が出口に近い方にさせてもらっよ」

置いておいた荷物をベッドに乗せて整理を始める

「ラウラはゲームってやった」なぜ聞かない「……聞くってさっき一夏をぶったことか？聞いたら教えてくれるのか？」

無言で何も言わないラウラ

「それに俺、弟みたいな一夏をぶったれたんだから怒ってるんだからな」

「弟……なぜアイツの事をそんな風に言っんだ、アイツは教官の……」

「なあラウラ……お前さっき認めないって言ってただろ？どうしてか少しいいから教えてくれないか？あの一夏だし……ぶったお前にも一理あるかもしれないだろ？」

そのあと少しずつだがラウラ自身の事、千冬さんに指導してもらい今の地位を手に入れたこと

一夏がつかまり千冬さんの経歴に傷がこと  
ゆつくりとそして強く話してくれた

「そうか……正直に言つと俺は千冬さんが間違っていると思わない  
し、一夏が悪いとも思わない」

グワツ！つと襟元を掴まれ壁に押し付けられる  
そんな体のどこにそんな力があるんだよ

「なぜだ！なぜなんだ！織斑一夏のせいで教官が！」

「違う。お前が理解できていないんだよラウラ」

ガン！ともう一度壁に押し付けられる

「何を理解していないというのだ！私は「お前家族つてもんがわか  
つてないんだよ」家族……だと」

「そう、家族だ。家族つてすごいんだぞ？助け合つて生きてるんだ。  
別にラウラに今すぐわかれてことじゃないんだよ、ただわかつて  
ほしい、誰も悪くないあえて言うなら一夏を捕まえたやつつてここ  
かな」

「私にはわからない、織斑一夏が捕まらなければよかったのだ」

「おいおい一般人にそんなこと無理だろう？それは軍に育てられた  
こそこできるかもしれないことだ。できるわけないぞ。でも一夏が悪  
くないわけでもないし、ましてや千冬さんだって悪いかもしれない」

「なんだと！！！」

ガン！またやられた……痛い

「だってそうだろ？ISの王者だぜ？世界一位だぞ？各国がどんな手段でも欲しいもんだろ？だから一夏が狙われる可能性も考えられたんだよ」

「ならば生まれてこなければよかったのだ！」

バチーン！

「黙れ！！！！お前がそれを言うのか！！普通に生まれてきたくてもできなかった奴がいるんだぞ！！！！なんでお前がそんなこと言えるんだよ！！！」

ついカツとなつてぶつてしまった

手のひらが痛い……だから暴力つて嫌なんだ

相手も自分も痛いんだから

「お前がそんなこと言ったら……悠達が存在が否定されてるように思えるんだよ……。頭冷やしてくる……。先寝てていいぞ」

そいつってラウラの手を放して部屋を出ていく

俺は知らない

「安部 零時を調べてくれ」

とラウラが言っていることを…

寮の外

「はあ……やっちゃった」

「門限は過ぎているのだから」

ぶった手を見つめてため息をついていると千冬さんがやってきた

「もうそんな時間だったんですね、気づきませんでした。うわ！飯食うの忘れた、ということで戻ります」

寮に戻ろうとすると

「待て」

首根っこを持たれてグエツ！となる

「アイツがああなったのは私の責任でもある」

アイツとはきつとラウラのことなんだろうな

「そうですね、千冬さんが甘やかしたせいですね。でもああなったのはラウラのせいできつかけが千冬さんでも結局はラウラ自身のせいだと思いますよ。」

「そうか……アイツこと面倒見てやってくれ」

「さっきあなたの弟ぶたれてましたが？」

「それでもだ、それに一夏にとってはいい機会だろう」

今一瞬ぶたれたって聞いてムカッってなっていたのを見逃さない

「ラウラを超えるべき壁にするってことですか？」

「お互いの壁……だろうな。だからこそお前に頼む、年上なんだろう？」

（「ー」）ニヤリと言ってくるがこんな時だけ年上扱いしないほしい

クラスでも年上扱いで先輩と言ってくるがアレはけじめっぽいもので遠慮はしていないから助かる

「まったく……手のかかる弟を持つと大変ですね」

「そうだな……」

そのあとしばらくして部屋に戻って行った

「うを！起きてたのか？！」

「……」

部屋の扉を開けて目の前のところに仁王立ちしていたラウラがいた

「聞きたいことがある」

わざわざ明日ではなく今日なんだろうか？

「どうして織斑一夏や相沢悠は家族ではないのに助ける」

「家族のような仲間だから。悠に至っては家族同然だな」

即答！だってなんとなく聞かれそうだな～とは思った

だって巧にも聞かれたことがあるのだから、ラウラは前の巧に似すぎてる

「むしろ血は繋がっていなくても家族になれると思っている。じやなきや悠達のこと手伝ってないかもな」

「そうか」

そういつてベッドに入ってしまった

それだけか……あ！悠に連絡すんの忘れた……明日でいいか

「なあ箒……もう悠は怒らせないようにしないな」

「あ、あああの状態になられては私も手が負えないな」

「むしろIS展開していても怖気そうな気がいたしますわ」

「あの人は零時の彼女さんなのかな・・・？」

おいそこの4人！怖がつてないで助ける！もとい助けて！

「なんで言わなかったのか聞いてるんだよレイちゃん……しかもラウラちゃんと……！しかも好感度上がってるし！何があったか話してみなよ……！！！」

「ひい……！」

昨日言わなかったせいで笑顔で怒ってくる悠

しかもたまに「聞いてんのか？ええ……！！反省してんかって聞いてんだよ……！」

みたいにケンカ腰でくる、いつもの悠じゃなくて余計怖かった

そして千冬さんが来るまで教室で正座させられていた

ちなみに朝のHR過ぎて一時間目が30分過ぎたぐらいで入ってきた

足が痛い……そしてクラスには暗黙の了解として安部零時と行動するときは相沢悠に連絡取るべし！というのができたらしい

放課後、アリーナ

いつものメンバー＋シャルルで訓練に来ていた  
悠は楯無のことを手伝うといって2人は今日来ない

「なあ零時……昨日のアレ結局どういうことだったんだ？」

「昨日の事って何よ一夏、零時のこと？」

「昨日って言いますと零時さんの同室事件以外になにかありましたでしょうか？」

おい鈴とセシリア！お前ら言いたい放題だな！

「お前IS展開中に聞くなよ……アレはお前が聞いた言葉そのまんなの意味だよ……かつてにラウラから勝手に聞いたが一夏……お前自身が一番よくわかってるだろ？」

「まあ……な」

その時のことを思い出しているのか落ち込む一夏

「だから強くなるためにこうやって訓練してんだろ？それに俺と違ってお前は優秀だからな、目に見えて強くなってるのがわかるよ、さすが千冬さんの弟だな」

「そうだな……千冬姉の名誉のためにも頑張るよ、それに零時のために……零兄のために」

一夏に零兄と言われたのはうれしい、昨日ラウラに言った”血は繋がっていないとも家族になれる”を一夏が証明してくれた気がする  
「何言っただ弟の癖に……しかし出来のいい弟って言うのも悔しいな」

「そうか？ISにしたら強くなってる気がしないからいまいちなんだけどな……」

「それよりも昨日のアレとは何よ<sup>what</sup>ー！」「」

元気がいいな鈴とセシリアは……ちなみに箒は今打鉄を取ってきているところだとちょうど来たな

「遅れた、何の話だ？」

「昨日実はボーデヴィツヒさんが零時の荷物を運ぶのを手伝いに来たとき一夏のことをぶったんだよ」

あ……一夏ハーレムの前でそれ言ったら

「「「もっと詳しく……！」」」

『シャルルあとはよろしく、一夏説明はシャルルに任せて訓練始めよう』

個人間秘匿通信で一夏へと通信する

『お、おう』

そういつてアリーナのスペースの空いているところに移動する

「さっき強くなってるかわからないって言ってたよな？俺と一対一やらないか？」

「そっぴや零時と一対一でやったことないな、むしろ一対一自体しないか」

実はみんなで訓練するものだからいつもペアでやるから一対一自体やらないのだ

「ってことでやるか？」

「もちろんだ！本気で行くぞ！」

やる気満々の一夏

「なら電波攻撃も遠慮なくさせてもらっぴからな、時間経てば俺に制御とられんぞ？」

（「――」）ニヤリ

「それは零時が生き残れてればの話だろ！」

雪片式型を展開した一夏が切りかかろうと迫ってくる

対して俺は悠と試行錯誤し、楯無によって試されたスタイルでいく

「つて盾?!」

一夏のびっくりする声が聞こえる  
まあ普通に盾だけならいいのだが

「アイギスとタケミのことを考えれば完全防御型の両方盾装備の方がアイギスにはあってるんだよ」

タケミは例のごとくたまに復活してまた反応がなくなる状態のままだ

盾があっても攻撃をやめるつもりはないらしくそのまま切りかかってくる

それを右盾でガードして左盾で一夏を押し返してから距離をとる

「逃がすか！」

そういつて一夏が近づいてくる

スペックからいって違うのだから簡単に距離はつまる

しかも箒に鍛えられたせいかわ剣筋がよくなっている

それも盾で不正でバックする

「また逃げんのか!?くそっ！」

「へっへっへ！バカ正直に相手する必要ないんだな、ほれあと半分  
んで侵入できちまうぞ」

「くそ〜！うおおおおおおお！！！！」

やけになった一夏が何回も斬りかかってくる

バキ！

「ちょ！盾壊しやがったな！」

斬りかかりにより盾に大きなヒビが入る

その隙を見逃さないそうにさらにスピードを上げてくる

フェイク交じりで斬りかかってくるものだから盾で防げない時があ  
る、唯一の救いは零落白夜で斬りかかてきていないこと

それでももともとからシールドエネルギーの少ないアイギスではもう瀕  
死状態になってしまう

まるでボクシングでタコ殴りされてる状態だ

防ぐことに夢中で電波攻撃ができていない

結局そのまま負けてしまった

「はあ〜……負けたし」

『やっと終わって試合をやっているから待ってて見れば……はあ……  
だらしない』

お久しぶりにタケミが展開し姿を現す

「お前えええ！！久しぶりに出てきたかと思ったら！！俺だって頑

張ったのに！だらしないってひどくないか！？」

『実際一夏の成長は著しいものです、さすがは織斑家ってことなのでしょう。しかし私がだらしないといったのは一夏に負けたことではありません、私は前に言いました、あなたは強くなると……実際アイギスにあつたスタイルを考えるとところまではあっています』

なら盾での防戦一方の戦い方が間違っていたのだろうか？

「違つよレイちゃん」

振り返ると打鉄・改を展開している悠が後ろにいた

「アレ？生徒会の手伝いはどうしたんだ？」

「タケミに呼ばれて来たの」

ちよつと不機嫌そうに言う、いったいなんて言つてよんだんだ？

うわ…やるなタケミ

楯無にも怒られそうだな

「話戻すけどきつとアイギスの防戦一方の戦い方はアイギスにあつてと思うよ」

「じゃなんで俺はあきれたんだよ？間違つてないんだろ？」

「アイギスには」だよそこに展開するレイちゃんが使うことが入っていないんだよ。周りのみんながISのスタイル「乗り手の特性」つてなつてたから気づかなかつたんでしょ」

『悠はわかつていたのですね』

なぬ！ならなぜ教えてくれなかった？！

「アイギスの特性を生かした戦い方を覚えるのも必要だったし、何よりレイちゃん自身に気づいてほしかったの」

な、なるほど……

悠にいつも甘えていたのがよくわかったよ

「それで……どうして私のことを呼んだの？」

『取り込んだISの教育が終わったのでその相手をしてもらいたいのです、今なら半分ぐらいエネルギーを削れると思いますよ』

「へえ、いいよ」

そのあとタケミのそばにISが展開していた  
こっ！これは！

「チエルミナートル！良いね！良いよ！タケミナイス！かつこいいよ！」

ん？おかしくないか？だって俺あの黒いIS取り込んだんだぞ？

「なあなんで姿形変わってんだ？タケミが変えたのか？」

『そうです、アイギスの膨大な拡張領域で変換したのです。変換している間にこの子に知識と経験をさせていたのです』

ふむ……わからん

『とりあえずその子に名前を』

「そりゃあ見た目でもうチエルミナートルじゃんか、短くしてチエルミナってとこだな」

『了解しました、では悠にあとはお任せします。指示を出せば従うので頼みます』

「わかったわよ、ついておいで」

そいつって悠とチエルミナがアリーナの空いているところに向かつて行った

「また増えたんだな、あのチエルミってのにもAIってのがあるのか？　つか見るからに零時よりはつよそ」「あああ？　なんだよ一夏ああ？　文句あんのか？」「イエナニモ」

まあ… 本当の事なんだが…

『ありますよ、おそらく不明ISの時点で積んであったのでしょう。それを私が改造して今はあの黒いISであってそうでないISとしか言えませんね。それより一夏は零時の強さをどう思いますか？　正直に言って構いません』

一夏がこつちをちらって何度も見てくる

「……言って構わない」

「じゃあ言うけど、いつものメンバーではやっぱり一番弱いかな…でも弱いつて感じたことないんだよ…むしろ訓練機の箒の方が戦つて弱いつて思うかな、これは箒だけじゃなくてみんなにもかな？ 実際勝ち負けで言えば弱いんだけど戦つてみると強いんだよ、みんなに負けてるのに。でも今回は…そうは思はなかったかも」

そんなに負けてるとか弱いとか言わなくてもいいじゃないか…俺泣いちゃうぞ（ノド、）シクシク

『どうしてかわかりますか？これは博士が私を作ったのかにも繋がりますよ』

タケミを作った理由？

だって俺は強くないし…あれ？勝ったことないんじゃないかね？いやきつと数回あるって…

「あああ！俺わかったかも！束さん意外と零時のこと過保護なんだな」

ちょー！一夏わかつちやつた？！

「マジか…俺わかんねー」

「なら俺が教えてやるよ、零時って基本平均的になんだったってできるだろ？それってISでも同じで平均的になんだったってできてたんだよ、でもそれが防戦一方の戦いになって全部そつなくこなしてたのが一つだけに絞ったから今回は強いって思わなかったのかも」

『正解ですー夏』

結局俺も平均能力のせいなのね

『零時にはこれからは”圧倒しているのに勝てない相手”を目指してもらいます』

「つまり嫌な奴を目指せと?」

「相手の弱点を絶対持つているって考えろよ、自分の事そんな風に言うなよ」

それもこれもお前らがさっきから弱いとか負けるとか言うからだよ!

『とりあえず明日から始めます』

そうして今日はそれで解散

ちなみに悠はチェルミに普通に勝った、エネルギーは半分は減っていないかった

## 部屋

ちゃんとラウラの部屋の方ですよ、一夏の部屋に行ったとか間違えてなんていないんだから！

「ようラウラ、もう飯行ったか？」

部屋に入っただけに、部屋にもともとあったディスプレイパソコンの前に座っていたラウラを見て声をかける

「レーションを食べるから行く必要はない」

「それは非常食にしとけ、それに俺は部屋で飯を食うことは許可しないぞ。ほれ、行くぞ！」

ラウラの首根っこを掴んで学食まで連行していく  
そして学食の前には

「やっと来た！零時！あなたタケミの持ち主でしょ！しっかり管理してよ！今日は仕事大変だったんだから！」

疲労と書いてある扇子を持って俺に近づいて問い詰めてくる楯無

「ラウラだあゝ、一緒にご飯食べるよね？」

ラウラに近寄って微笑みをかける悠



（え？原作？主は第三話まで放送してた時に第一話を見てすぐに買いに行きましたよ？もちろんちゃんと読みましたよ？それを見て悠をああしたら「レイちゃんはお私だけ見てればいいの！」とか言い出して楯無とか学園そのものにケンカを売る子になりそうでしたw）

話を戻そうw

「それとも私がs y「お願いそれ以上言わないでください、俺が謝るから許してください悠さん」わかったよ……でもどうしても我慢できなかったら私がs y「いいです」もう……遠慮しなくたって「してない良いから飯行こうぜ」はいい」

楯無がまだ赤くなって停止しているが気にしない

「話が読めないが……それも悠の力のせいなのか？」

食券を買って定食のところに並んで待っているとラウラが聞いてきた

「せいって言うかまあそうだな」

「お前は見られて怖くはないのか？なぜあの時のように疲れていないのだ？」

んないっぺんに聞くなよ

「えっと…俺は別によくないが良いぞ。夜のことを見られて次の日その感想を言われた時は泣いたがな」

夜？と言いながら頭にはてなマークを浮かべるラウラ

「アレは仕方ないじゃん。あとアレはレイちゃん以外だったからだよ、私レイちゃん以外はあんまり見ないの……怖いから見れないんだ」

笑ってはいるが明らかにひきつってるような苦笑いだ

「そういうものなのか？」

「そういうもんだ、さ〜て食うぞ〜」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7745t/>

---

I S -AVERAGE or HALF-

2011年11月6日15時03分発行